京都の祭り・行事

―京都市と府下の諸行事2

京都の祭り・行事 ―京都市と府下の諸行事2

京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会

凡　例

・本書は，京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会が普及啓発事業として令和２年度に実施したパネル展示の図録である。

①令和２年（2020）11 月５日（木）～ 11 月 20 日（金）

ゼスト御池〔寺町広場〕

②令和３年（2021）２月１日（月）～ ３月９日（火）

京都府立京都学・歴彩館〔京都学ラウンジ〕

③令和３年（2021）２月 20 日（土）～３月 21 日（日）

南丹市立文化博物館〔ロビー〕

・本書の編集は，福持昌之（京都市文化財保護課）が行った。

・本文の執筆については，井尻智道，伊藤勲，今中崇文，上田喜江，鵜島三壽，川又純，大東敬明，髙屋千晴，成瀬陽一，福持昌之，前田昌弘，向田明弘，山本紗綾，山本拓人が行い，執筆分担は末尾に示した。

・本書は，文化庁の令和２年度地域文化財総合活用推進事業（地域文化遺産）の助成をうけて実施する「京都の文化遺産総合活性化事業」の成果の一部である。

ごあいさつ

京都には，地蔵盆をはじめとした地域の伝統行事が多く残されています。それらの行事がおこなわれる地域社会は，近世の村や町組（ちょうぐみ），あるいは神社の氏子地域など，歴史的・伝統的な人々のまとまりであり，伝統行事は地域のまとまりの象徴であるだけでなく，地域住民の親睦の機会や，地域社会を健全に維持する機能の一部を担ってきました。しかし，近年の社会構造や人々の意識の変化によって，これら伝統行事が縮小されていくという風潮も見られます。そして，令和元年(2019)11月に中華人民共和国で発生が確認された新型コロナウィルスの影響で，日本では令和２年２月以降，伝統行事の多くが中止や縮小せざるを得なくなりました。

これまでも，地域の伝統行事は地域の生活に欠かせない存在なのか，あるいは時代遅れで非合理的な存在なのか問われる場面もありました。

コロナ禍における多くの国々の政策では，生命維持を最優先し，全ての経済活動・文化活動は「不要不急かどうか」が問われています。観光業やイベント関連の従事者にとっては，生活に関わる問題となっています。文化財の分野でも，能・狂言，歌舞伎や文楽などプロによって保持されている「無形文化財」にも共通する問題です。

それらに比較すると，地域住民によっておこなわれる地域の伝統行事や民俗芸能は，中止による影響は少ないと考えられます。しかし，伝統行事や民俗芸能は毎年の開催のなかに継承のシステムが組み込まれており，わずか数年の空白が，滅失の決定的な要因となり得るのです。また，それらを支える裾野はたいへん広く，例えば祭礼行事に必要な特殊な物資や原材料の生産業者などは，その技術自体が貴重な文化遺産なのですが、中止が続くと廃業せざるを得ないこともあるでしょう。伝統文化の継承，そしてそれに関わる人々の生活の維持といった視点からも，これからの伝統行事のあり方を考えていく機会ではないでしょうか。

本書では，昨年度の『京都市と府下の諸行事』と同様，これまであまり注目されてこなかった行事などに光をあてるとともに，コロナ禍における地蔵盆の取組みを紹介するなど，さまざまな角度から祭り・行事とその魅力を紹介したいと考えています。

京都芸術大学 舞台芸術研究センター
所長・教授　天野文雄

目　次

ごあいさつ

1　京都市の祭り行事

井上頼寿資料と八瀬天満宮社例祭 ― 八瀬祭 ― …… 2
大善寺の六地蔵巡りと地蔵盆…… 4
真如堂のふたつの地蔵盆…… 5
等安町の地蔵盆と供物…… 6
等持院北町中部の地蔵盆…… 7
上鳥羽六斎念仏と地蔵盆…… 8
吉田木瓜大明神の剣鉾差し…… 9
粟田神社の剣鉾行事…… 10
井上頼寿資料と粟田祭 ― 粟田神社大祭 ― …… 11
與杼神社の秋季大祭（與杼祭）…… 12
市原の秋祭と俵神輿の製作…… 13
松原中之町のお火焚き…… 14
山科義士まつり…… 15
井上頼寿資料と伏見稲荷大社 大山祭 …… 16
竹田の延座参座…… 18

2　南丹市の祭り行事

都々古和気神社の大護摩・火渡り…… 20
横田六斎念仏…… 21
川辺四社の神幸祭…… 22
生身天満宮の秋祭り…… 23
摩気神社神幸祭…… 24
大送神社の綱引き…… 25
西光寺六斎念仏…… 26
幡日佐神社・大送神社 秋祭り …… 27
田原の御田…… 28
牧山の松明行事…… 29
多治神社秋の祭礼とカッコスリ…… 30
胡麻日吉神社の馬かけ…… 31
芦生わさび祭り…… 32
田歌の田楽…… 33
川合・殿・盛郷の上げ松…… 34
芦生松上げ…… 35
樫原の田楽…… 36
棚野の千両祭…… 37
道相神楽…… 38

3　伝統行事のいま

京都市内の神輿…… 40
祇園祭“山鉾”の読みについて …… 41
京都をつなぐ無形文化遺産「京の地蔵盆」…… 42
新型コロナウイルス（COVID-19）禍
　における地蔵盆の開催状況…… 43
初詣のあれこれ…… 44
もうひとつの年越し“節分” …… 45
京都をつなぐ無形文化遺産…… 46

4　資料

展示の記録…… 48

1 京都市の祭り行事

井上頼寿資料と八瀬天満宮社例祭

―八瀬祭―

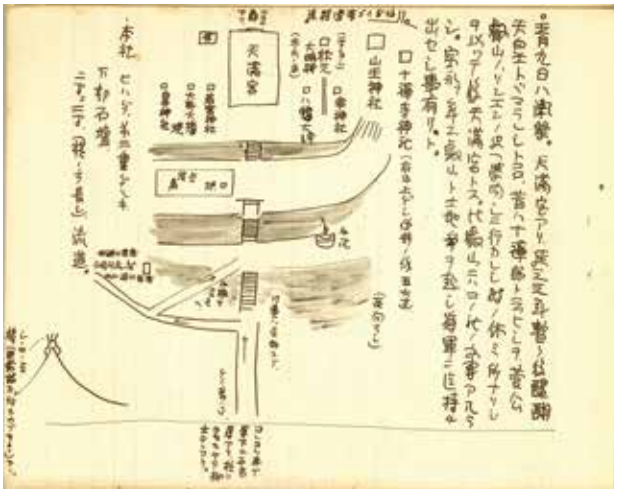
井上頼寿(1900～1979)は，京都府，滋賀県，奈良県など，近畿地方を中心に民俗の調査を行った人物である。國學院大學(東京都渋谷区)は，そのノート・メモ類を所蔵している。これらは，平成19年に井上頼輝氏より寄贈された井上氏旧蔵資料の一部である。

そのノート・メモ類は，大正末期から昭和前期にかけての祭りの様子を知ることができる貴重な記録であり，京都府及び京都市と國學院大學は連携して，本資料群の共同調査に取り組んでいる。

大正15年(1926) 5月9日，井上は八瀬天満宮社例祭(八瀬祭)を見学した。その詳細は「八瀬祭を観るの記」として『風俗研究』86号と91号(ともに昭和２年)に連載されている。この記述によれば，この日，比叡山へ行こうと八瀬まで行ったところ，停留所で八瀬祭のビラを見て，八瀬天満宮社へ赴いたようである。この「八瀬祭を観るの記」は，『蔦葛』No.11(大正15年)，『京之山』No.４(主として神道に関する資料)，『京之山』No.６(主として神饌資料)(いずれも國學院大學所蔵)をもとにしてまとめられたと考えられている。

『蔦葛』は，彼が持ち歩いていたメモ帳で，鉛筆で走り書きのように記され，ところどころペンや筆で書き直している。『京之山』は，『蔦葛』に書き留めた情報や見聞きしたことをまとめたノート(主にB5)である。

『京之山』No.４は，様々な祭りを集めたノートであり，この祭りについて見聞したことが八瀬天満宮社の見取り図をはじめとして，詳細に記される。キーワードとしては，童女，童男，神饌，祭ノ着物，御輿飾リ(草花)，馬ノ鞭，願ノ馬，冠，まはし，警蹕，神職走ル事，頭ハリアヒ，神楽，賽銭，酒，歌ノ神移シ，花鉾，御旅神饌，大夫翁ノ謡，笏フリ，かんじょう(縄)を挙げる。『京之山』No.６は，神に捧げる食事である神饌についてまとめたノートであり，「八瀬天満宮祭神饌(五月九日)」として，「午前本社へ上ゲル神饌」ほかを描く。これには粽や七色，餅，酒などが描かれる。



『京之山』No.４(國學院大學所蔵)

井上頼寿は，八瀬天満宮社例祭（八瀬祭）の記録を，メモ・ノート・著作に残しているが，鉾（剣鉾）についての記述は，メモ（『蔦葛』No.11）が詳細である。

八瀬祭の祭礼には，「鷹羽の意匠の剣鉾」（以下，「鷹羽」），「澤瀉の意匠の剣鉾」（以下，「澤瀉」），日と月の扇を取り付けた「扇の意匠の剣鉾」（以下，「扇」）が出る。

『蔦葛』No.11，67頁の鉾の図をみると，上部に「鷹羽」，中央に「扇」，下部に「澤瀉」を描く。「八幡宮（表）」「正徳四歳三月廿五日（裏）」とあるのは，「鷹羽」の額に刻まれた文字である。中央は「扇」であり，扇には月とともに牡丹などの意匠があることがわかる。右下の鉾全体の図は，「扇」のものである。「扇ハ鉾ノ両方へツク，月ト日ノ穴アケリ。」として，この鉾の構造を記す。下部は「澤瀉」である。この鉾の額には「六所権現」と刻まれる。「権」に「ゴン」とふりがなを振っているのは，後にメモを見たときに，この文字を判読しやすくするためであろう。68頁上部には鉾につけられた鈴と中の針金を描く。

『京之山』No.4には「鉾三本出シテ本殿ノ左右ニ立ツ」，躑躅や桂を飾った黒い柄の鉾（花鉾）があって，これは石垣に立てかけられていたと記す。

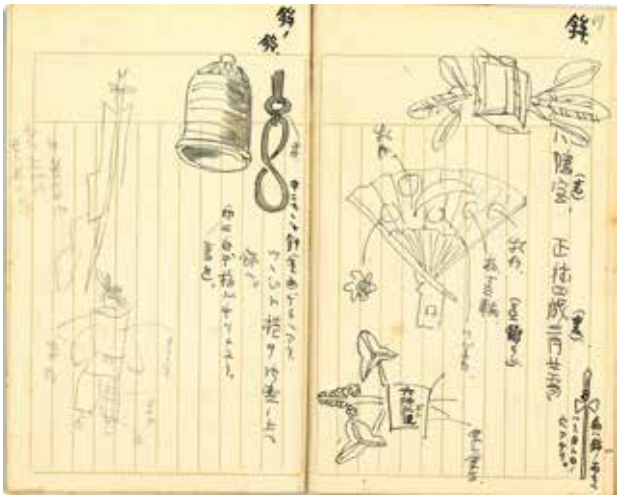
また，八瀬祭で行われていた馬駈けに井上は注目している。メモ帳やノートには，騎者や，馬につく紺の法被を着た人が持つ「馬ノ鞭」の絵が描かれる。「馬ノ鞭」は鯨尺で2尺（約76cm）の朴の木に緑・黄・藍・赤の色紙を巻いて，先の方に赤・黄・藍・緑・白の紙を切って束ねたものを付けたものである。なお，騎者が持つ鞭は，竹に五色の紙を切って巻いたものである。

これらの絵は，現地では速記のように記し，ノートには丹念に描かれている。

（大東敬明）

参考文献 ■ 福持昌之「八瀬天満宮社 例祭」
（『京都 剣鉾のまつり調査報告書 2 民俗調査編』2014年，京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会）

『京之山』No.6（國學院大學所蔵）



騎者［左］（67頁）と鉾［右］（68頁）『蔦葛』No.11

［左］花鉾『京之山』No.4
［右］馬ノ鞭，童女『蔦葛』No.11

大善寺の六地蔵巡りと地蔵盆

京都市伏見区桃山町西町

伏見地蔵として親しまれている大善寺(浄土宗)は，六地蔵巡りの６寺院のうちの１か寺であり，六地蔵巡り発祥の地としても知られている。寛文５年(1665)の『山城州宇治郡六地蔵菩薩縁起』(大善寺蔵，写本一巻)によると，小野篁によって一本の木から作られた六体の地蔵像を，後白河院の時代に，四の宮河原，六地蔵の里，上鳥羽，御菩薩池，桂の里，常盤院の６か所に分祀したという。また，同縁起には，7月24日に多くの人々が６か所の地蔵菩薩に参詣するとも書かれており，今日の六地蔵巡りは江戸時代に成立したと推測される。

六地蔵巡りは，大善寺，浄禅寺，地蔵寺，源光寺，上善寺，徳林庵の６寺院を巡拝し，お幡を授かる行事で，バスツアーもあり，府内外から参拝者が訪れる。各寺院で色が異なるお幡が授与され，大善寺は白色のお幡である。集めた６色のお幡を玄関に吊るすと，厄除け・家内安全等のご利益があるという。現在，六地蔵巡りは新暦の８月22・23日に行われており，大善寺では檀家の総代と婦人会の方々が交代で受付を担当し，早朝から深夜まで訪れる参拝者の対応にあたる。

古いお幡は，境内のテントに張られた紅白の綱に結ぶ。同テントでは水塔婆の水供養も行われる。また，８月22・23日の朝と晩に，地蔵堂でご住職が読経を行う。

地蔵盆も，大善寺では六地蔵巡りと同日に行われる。行事内容は，御詠歌と数珠回しである。８月22･23日の午後１時頃から，観音堂内で吉水流の御詠歌があげられる。これは，檀家の婦人会の中で，吉水講に所属している方々によって行われる。８月23日の午後５時頃から，本堂でご住職の読経の後，数珠回しを行う。大善寺の数珠回しは約10年前から行われているが，少子化に伴い子どもの参加者も減少し，2019年は近隣の子ども４名が保護者と参加した。吉水講の方々やご住職等も加わって車座になり，全員で「南無阿弥陀仏」と唱え数珠を回していく。白い房のついた大きな珠が自分の前に来ると，額に近づけ拝む。徐々に念仏の声や数珠の回し方が速くなる。また，大善寺周辺の各町内でも地蔵盆が行われており，読経の依頼を受けたご住職が，お寺での行事を中座して向かうこともある。

(山本紗綾)

地蔵堂に参拝する人々(右は観音堂)

テント内の綱に結ばれた古いお幡

観音堂での御詠歌

〔実施時期〕　８月22～23日
〔実施場所〕　大善寺
〔伝承組織〕　大善寺及びその檀家(地区ごとの総代，婦人会，吉水講)
〔文 化 財〕　未指定

参考文献 ■ 真鍋広済・梅津次郎共編『地蔵霊験記絵詞集』(1957年，古典文庫)

真如堂のふたつの地蔵盆

京都市左京区浄土寺真如町

真如堂は，正式には眞正極楽寺といい，永観２年(984)に比叡山の僧戒算が，延暦寺の常行三昧堂の阿弥陀如来像を神楽岡に安置したのに始まるとされる。応仁の乱では，本尊は戦火を避け，比叡山青龍寺，近江国穴太の宝光寺，洛中一条町と移転し，文明16年(1484)に旧地の神楽岡に帰座するが，再び室町勘解由小路や京極今出川へ移り，1693年(元禄６)に東山天皇の勅により，真如堂が現在の寺地に復した。

毎年８月24日の地蔵盆会は，一山の僧侶で営まれる。午前８時，千体地蔵堂の前に集まり，貫主が導師となり護身法の印を結んで地蔵菩薩の真言(オン カカカ ビサンマ エイ ソワカ)を唱えた後，一山の僧侶が法華経の自我偈を唱和し，その間に順に焼香をあげる。最後に，再び導師が祭壇の前に進み，一山の僧侶が真言を唱和する。それら一連のお勤めを終えると，焼香香炉を載せた三方を鎌倉地蔵へ運び，そこでも同様にお勤めをし，三千仏堂，應當膽禮大士像，三界萬霊塔の石仏群，万霊堂の順に，同様のお勤めをおこなう。午前８時20分頃，一山の僧侶は万霊堂で解散する。古くは，真如堂の元禄６年(1693)の寺務日誌(『秋 日並之記』)の７月24日条に「地蔵法楽一山勤行ニ本堂へ出仕」とあり，明治末年の記録には「地蔵盆会」として「午前七時鳴鐘次第一山総出仕鎌倉地蔵ニ於テ阿弥陀経読誦ノ事，備物 素麺二十包，鬼灯二十，桃二十，茄子二十，餅二十」とある(『明治四十五年改 年中行事』)。

この地蔵盆会とは別に，真如堂では真如町西部町内会の地蔵盆も行われる。真如町西部では，もともと町内の３か所で地蔵盆が行われていたが，昭和60年代に集約され，真如堂の千体地蔵堂で行われるようになった。令和元年(2019)は，８月17日の朝から行燈に絵を描き，お地蔵さんに化粧する。お勤めの後、お昼におにぎり、おやつにスイカ。夕方まで子供たちが遊ぶ。18日も，午前10時からお勤めと数珠回し。その後も，子供たちは夕方までゲームや福引を楽しんだ。

(福持昌之)

真如堂蔵『明治四十五年改 年中行事』

千体地蔵堂での地蔵盆会

真如町西部町内会の数珠回し

〔実施時期〕 地蔵盆会８月24日，地蔵盆８月24日に近い土・日曜日(コロナ禍のため2019年は中止)
〔実施場所〕 真如堂(眞正極楽寺)
〔伝承組織〕 宗教法人眞正極楽寺，真如町西部町内会
〔文 化 財〕 未指定

等安町の地蔵盆と供物

京都市伏見区等安町

等安町は，近鉄伏見駅と京阪丹波橋駅の中ほどに位置する。御香宮神社の氏子地域で，多くの花傘で知られる神幸祭（10月上旬）では等安町にも神輿が渡御し，町内で小休止する。お地蔵さんの祠は，上板橋通から南に入る路地にある。祠の脇の石燈籠は安政６年（1859）の建立。数珠繰りに使う数取札の箱には「数取札箱／慶応元年（1865年）八月日／高田組 等安町」と墨書があり，この町の幕末の地蔵信仰の様子がうかがえる。

地蔵盆は８月24日に近い土・日曜日で，前日には祠から石のお地蔵さんを厨子ごと隣の集会所に運び，供物の準備もする。まず，４つの朱塗の三方に載せる供物は，竹の棒を芯にして，長さ約30cmの麦藁を直径７cmほどに束ね，白い包装紙で巻く。棒は下に約15cm，上に約９cm突き出しており，下の棒を三方の上面にあいた穴に上から突き刺して固定する。三方に白い筒が立つと，周囲に青い杉葉を立て水引で括る。杉葉は，尖っているほうが邪気を祓うのに良いらしい。さらに，四方に，煎餅を竹に挟んだものを立て，杉葉の筒ごと針金を回して固定する。煎餅を挟む竹は長さ約31cmで，上から節のところまで２つに剥ぎ，その間に３枚の煎餅を挟む。以前は糯米の粉（餅粉）を水でこねて蒸し，丸く成型して焼いた「麩焼煎餅」を使っていたが，近年はそれに近い感じの市販の煎餅を使っている。筒の上部の棒には，鬼灯の皮をむき実を露わにしたものを３つ，針金で縛る。そのほか，別の朱塗の三方に，紅白のまんじゅうを１盛ずつ供える。板足三方には，ご飯，野菜の炊いたん，吸物，茶を載せて，祭壇の中央に供える。厨子の中のお地蔵さんは化粧がされており，薄くなったり汚れたりすると直すという。

例年，地蔵盆の１日目（土曜日）は，午前9時からと昼頃に数珠繰りがあり，子供たちは，ヨーヨー釣り，ビンゴなどを楽しむ。午後７時から御詠歌があり，夜は花火やくじ引きをする。かつては，くじ引きの際に集会所の２階から「畚おろし」もした。２日目（日曜日）も午前９時から数珠繰りがあり，昼頃におひらきとなる。

令和２年（2020）は，新型コロナウィルスの影響で行事は縮小したが，お飾りは例年通りおこなった。　（福持昌之）

集会所に飾られたお地蔵さん

鬼灯と煎餅と杉葉の供物

数珠繰りを数える数取札（慶応元年）

〔実施時期〕　８月24日に近い土・日曜日
（本年は縮小開催）
〔実施場所〕　等安町
〔伝承組織〕　等安町町内会
〔文 化 財〕　未指定

等持院北町中部の地蔵盆

等持院北町は，等持院中町・等持院西町・等持院東町・等持院南町とともに，明治５年(1852)から等持院村と呼ばれ，明治22年(1889)に近隣３か村とともに衣笠村となり，大正７年(1918)になって京都市に編入された地域である。町内は東部・中部・西部の３つに分けられ，183世帯358人の人々が暮らしている(令和２年10月京都市住基データ)。

等持院北町中部にはお地蔵様が２躯あり，それぞれに祠が設けられ，安置されている。地区内は７つの組に分かれているが，北側に位置しているお地蔵様は１～４組と６・７組が，南側にあるお地蔵様は５組が祀っており，それぞれに地蔵盆が営まれている。地蔵盆の日程も異なっているが，おおむね，８月23日に近い土・日曜日に営まれている。

この地区においても少子高齢化の進行は著しく，地蔵盆への参加者もほとんど大人たちで占められ，当日の行事内容も僧侶による法要だけとなっていた。かつては法要だけでなく，子供たちが参加する数珠まわしやくじ引きなどが行われていたようで，北側のお地蔵様を祀る組には，箱の蓋裏に「昭和四十七年(1972年)八月吉日新調」と記された数珠まわし用の数珠が伝わっている。

平成28年(2016)より，北側のお地蔵様を祀る人々により，「地蔵盆子どもの部」として，子供の参加する地蔵盆が復興されている。午前中だけではあるが，僧侶の読経に合わせて数珠まわしを行い，それらの後にくじ引きや輪投げ，お菓子の配布などがなされた。この年は，等持院北町中部のみならず，東部や西部に住む子供たち，さらには北町に暮らす人々の内孫や外孫などにも参加が呼びかけられた。復興から５年目となる今年(2020年)は，新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い，子どもの部は中止とし，大人だけが参加する，法要のみの地蔵盆となった。　　(今中崇文)

〔実施時期〕　８月23日に近い土・日曜日
〔実施場所〕　等持院北町中部のそれぞれのお地蔵様の前
〔伝承組織〕　等持院北町中部１～４組と６・７組
　　等持院北町中部５組
〔文 化 財〕　未指定

北側のお地蔵様と地蔵盆の御供え

南側のお地蔵様

令和２年度の地蔵盆の様子
(北側のお地蔵様)

上鳥羽六斎念仏と地蔵盆

京都市南区上鳥羽

上鳥羽は旧千本通沿いの集落で，上鳥羽小学校付近にあった橋から北を橋上，南を橋浦(橋下)という。上鳥羽六斎念仏は橋上の上鳥羽橋上鉦講中が伝承しているが，かつては橋浦にも六斎念仏の講があったという。

上鳥羽の六斎念仏は，「京都の六斎念仏」の一つとして国の重要無形民俗文化財に指定されている。京都の六斎念仏は能楽や歌舞伎，祇園囃子などを取り入れた芸能六斎が多いが，当地は念仏六斎を伝承している。当地には，近世後期以降の古文書や六斎用具もあり，大正期までは芸能六斎もおこなわれていたことがわかっている。

そもそも六斎とは，ひと月のうち定められた6日間(六斎日)は戒めを守って暮らすという習俗で，この日に念仏を唱えると神仏の加護が得られるとされ，近世には六斎講や鉦講の集団が村を廻るようになった。

上鳥羽六斎念仏では，毎月23日の月次のほか，8月のお盆に活動が集中する。令和元年(2019)は，8月 11日に東山区の清水寺(北法相宗)での盂蘭盆奉納に出演，13・14日には家の仏壇に参る棚経が行われた。17日は橋上の5つの町内会の地蔵盆と個人宅の地蔵(1軒)を巡って六斎念仏を奉納している。橋浦にある浄禅寺(浄土宗西山禅林寺派)は鳥羽地蔵とも呼ばれ，8月22・23日は六地蔵めぐりで賑わうが，22日の午後7時頃から浄禅寺境内で上鳥羽六斎の奉納が行われる。8月の最後は27・28日の大日盆で，個人で祭る祠(14軒)を回って六斎念仏を奉納した。

上鳥羽では芸能六斎を伝える壬生六斎念仏講中の協力を得て，平成23年(2011)から芸能六斎の復興に取り組み，現在，およそ8曲の演目をもっている。　(上田喜江)

〔時期･場所〕　8月22日 浄禅寺(鳥羽地蔵)
8月23・24日前後 各町内会等の地蔵盆
8月27・28日 個人宅の大日盆

〔伝承組織〕　六斎念仏(上鳥羽橋上鉦講中)
地蔵盆(北・南元上之町々内会，五丁橋，東上之町北・南町々内会，南町北町々内会，北村山・上島田町々内会及び個人1軒)
大日盆(個人14軒)

〔文 化 財〕　重要無形民俗文化財「京都の六斎念仏」
(昭和58年1月11日指定)

六斎念仏（月次）

六斎念仏「焼香太鼓」(京都アスニー公演)

浄禅寺での六斎念仏奉納

個人で祀っている大日さんの祠

吉田木瓜大明神の剣鉾差し

京都市左京区吉田

愛宕郡吉田村の産土神であった木瓜大明神は，現在は今宮社として吉田神社の境内末社となっている。昭和13年(1938)頃までは，氏子で剣鉾を護持する組が５つあり、それぞれ約15軒で頭屋制を維持していたが，現在，唐胡麻鉾，矢鉾，松鉾，柏鉾，扇鉾の５基の剣鉾は吉田剣鉾保存会が管理している。

木瓜大明神の神幸祭は，古くは８月24日に行われていたが，現在は10月第２日曜日に行っている。神幸祭の２日前に御出の儀があり，本殿から御神霊を神輿に遷す。前日の宵宮では，太元講社資料館に「木瓜大明神」の神号軸を掛け，その脇に唐胡麻鉾を飾り，古例に従った神饌を供え，午後７時頃に祝詞をあげる。神幸祭では，午前９時頃から今宮社で神幸祭が行われ、その後，太元講社資料館で祝詞をあげる。先達役がサイアレ提灯を持って今宮社に向かい，「無上霊宝神道加持」と叫んで拝殿をまわると，それに続いて剣鉾も拝殿を廻る。剣鉾を差している間，先達役や鉾差したちが口々に「サイアレ，サイアレ」と囃すのが特徴である。巡行列は，前列と後列に分かれ，サイアレ提灯や剣鉾は神輿とともに後列を構成し，夕方までかけて，氏子地域を一巡する。

延宝４年(1676)序の『日次紀事』には，「土人捧二テ鉾五鉾一ヲ而前驅シ供奉ノ諸人擧レテ扇大ニ呼二フ有レ幸有レト幸而巡二リ吉田村外一ヲ則歸二-座シタマフ本所一ニ」とあり，住民が５基の鉾を差していたことや，「サイアレ」と唱えていたことがわかる。

昭和13年(1938)頃までは，津田寅治郎(1890 ～ 1978)やその弟子たちが鉾差しとして活動していた。その後，剣鉾が差されなくなり，昭和35年(1960)頃には唐胡麻鉾を除く４基の剣鉾の棹を短く切って曳鉾(台車に載せて巡行する鉾)になった。ところが，平成５年(1993)に十二提灯が復活したのを契機に，差鉾復活の気運が高まった同年，地元の有志が吉田剣鉾保存会を組織し，津田寅治郎の鉾差し仲間であった一乗寺の乾源次郎の子，乾正雄(1936 ～ 2009)を招いて技術を習得した。そして，平成８年(1996)から剣鉾差しが復活した。

近年，吉田では小学生や大学生などの育成に取り組んでおり，子供や女性の鉾差しの活躍もみられる。（福持昌之）

吉田神社の参道

近衛広場前で鉾を差す

旧の唐胡麻鉾の木部の文化３年（1806）の墨書

〔実施時期〕　10月第２日曜日
（本年は中止）

〔実施場所〕　今宮社（吉田神社末社）
および氏子地域

〔伝承組織〕　吉田剣鉾保存会

〔文 化 財〕　京都市登録無形民俗文化財
（令和２年３月31日登録）

参考文献 ■ 青江智洋「吉田神社末社今宮社 神幸祭」(『京都 剣鉾のまつり調査報告書２民俗調査編』2014年，京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会)

粟田神社の剣鉾行事

京都市東山区粟田口

牛頭天王を祭神ととする粟田神社の氏子地域は，東山三条から蹴上にかけての35か町で，そのうち19か町は鉾町であり，阿古陀鉾(瓜鉾)，地蔵鉾，柏鉾，三鈷鉾，菊鉾，弓矢鉾，鷹羽鉾，葵鉾，橘鉾，松鉾，獅子牡丹鉾，瓜巴鉾，垣夕顔鉾，葡萄栗鼠鉾，竹虎鉾，琴高鉾，日月龍鉾，桐鉾といった18基の剣鉾が伝わる。

粟田神社の例大祭は，古くは９月15日に行われていたが，現在は10月15日に本殿で行われる。ただし，神輿が渡御する神幸祭は10月体育の日に行っている。神幸祭前々日の土曜日，午後10時頃に本殿から神輿へ御神霊が遷される出御祭がある。前日の日曜日の午前中は各町で剣鉾を飾り，午後は各町の剣鉾を神職が祓い清め，午後６時からは夜渡神事として，阿古陀鉾(瓜鉾)と地蔵鉾が曳鉾として巡行し，知恩院(浄土宗)黒門前の瓜生石で，神仏習合の「れいけん祭」が行われる。神幸祭当日，正午過ぎに剣鉾(差鉾)を含む先之列が出発し，30分ほど後に神輿の列(後之列)が出発する。例年，剣鉾は６基ほど巡行に出る。剣鉾を差すのは粟田神社剣鉾奉賛会で，一乗寺，鹿ケ谷，北白川，吉田などの鉾差しも協力する。

延宝４年(1676)序の『日次紀事』には，前駆の列で17本の剣鉾があり，橋から鉾差しが川に落ちたり，鉾を川に落としたりするのが人々の興味をひいたとある。寛政９年(1797)の『伊勢参宮名所図会』には「毎歳九月十五日昼夜二度の渡御あり(中略)瓜の鉾を以て振り奉る，其余氏の町よりも鉾数多持連て随ふ，其飾いたつて美麗なり」と壮麗な様子がみえる。また，「夜ハ白川橋を越て水際を智恩院さかひの一ツ橋へ廻り此橋の上にて鉾の曲持工妙を尽す」と曲芸的な見せ場もあった。

粟田神社所蔵の明治43年(1910)の写真に，西町の巴鉾は「掻鉾」と注記があり，五軒町の矢鉾も同様の舁鉾であった。粟田神社の剣鉾行事は，各鉾町による儀礼が伝えられ，また差鉾だけでなく舁鉾(現在は曳鉾)もあるなど，多様な剣鉾行事が展開され今に継承されていることが特徴である。

(福持昌之)

菊鉾を護持する堀池町の鉾の飾り場

「れいけん祭」　左／阿古陀鉾　右／地蔵鉾

神宮道に並ぶ剣鉾
左から鶴鉾，垣夕顔鉾，葡萄鉾，
葵鉾，菊鉾，三鈷鉾

〔実施時期〕　10月体育の日(本年は中止)
〔実施場所〕　粟田神社および氏子地域
〔伝承組織〕　粟田神社剣鉾奉賛会
〔文 化 財〕　京都市登録無形民俗文化財
(令和２年３月31日登録)

参考文献 ■ 青江智洋ほか「粟田神社 粟田祭」(『京都 剣鉾のまつり調査報告書 2 民俗調査編』2014年，京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会)

井上頼寿資料と粟田祭

―粟田神社大祭―

大正14年(1925)10月15日の夕方，井上頼寿は，粟田祭(粟田神社大祭)に行った。この祭りに出かけるのは，前年に続いて2度目だったようである。大正14年の記録は『京之山』No.4，13年の記録は『京之山』No.1に記され，大正15年(あるいは昭和２・３年か)の記録は『京之山』No.8(神祇特輯)に記される。

13年，14年ともに，十二燈や鉾飾りに注目して歩いている。

十二燈は，２間余(3.6m)ほどの高さがある木の枠に12の提灯をつけたもので先には鈴や行灯が付けられており，歩くたびに鈴が鳴ったと頼寿は記す。

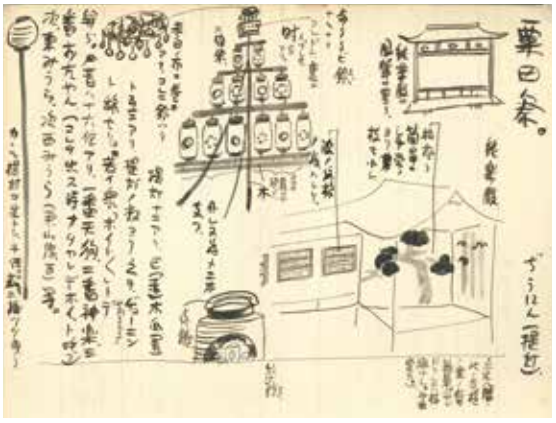
古老に聞いた話として，昔は16ほど出ていたが，今は電線にさわること，大人は喧嘩をすることから，２本くらいにした。かつては，十数本並んで街を練り，白川橋の上や粟田口の広い場所で「てうち」をしたと記す。当時は，子供がかつぐ１間位のものが多く出ていたようである。

十二燈の一つに「オタヤン」とよばれるものがあって，「ホイト」「ホイナ」といいながら，粟田神社へ参拝した。拝殿の中を通る時には十二燈を横にし，本殿の前で再び立てて，その場で右回りに５回ほど廻った。『京之山』No.1には，「三條ノ停留場」(現在の東山三条付近か)の所からオタヤンを大人がかついだ。子供が先に立ち，お多福の面の(描かれた)長い提灯を持っていたとする。これは「オタヤンデホイ」と叫びながら進んでいた。

鉾飾(トウヤ飾)も見て歩いており，『京之山』No.4には，菊鉾，瓜御鉾(阿古陀鉾[瓜鉾])，三条通応天門通東入南側の家に飾った鉾(垣夕顔鉾か)，矢御鉾(弓矢鉾)，松御鉾(松鉾)，葡萄に栗鼠(葡萄栗鼠鉾)，鯉に仙人の文様のある鉾(琴高鉾)，虎御鉾(竹虎鉾)，右に「日」，向かって左に「星」と書ける鉾を並べる(日月龍鉾)について記述がある。頼寿は，供え物に関心を持ったようで，品目，供え方を中心に記録している。『京之山』No.1に描かれた鉾飾りのスケッチは中之町の西村家の飾りで，左側の鉾は地蔵鉾ではないかとの指摘がある。「南無地蔵尊」(南無地蔵大菩薩か)と書いた軸を見たと記すことから，その可能性は高い。

(大東敬明)

『京之山』No.1（國學院大學所蔵）



ともに『京之山』No.4（國學院大學所蔵）

與杼神社の秋季大祭（與杼祭）

伏見区淀

與杼神社は，伏見区淀本町に鎮座しており，淀・納所・水垂・大下津の産土神であるとされる。もとは淀水垂町に鎮座していたが，明治33年（1900）の淀川改修工事に際して，現在地である淀城跡北側に移転している。本殿と拝殿は，桃山時代の姿をよくとどめていることから，ともに国の重要文化財に指定された（昭和46年）。残念ながら本殿は昭和50年に焼失してしまったが（昭和55年に再建），拝殿は現存しており，貴重な文化財として守り伝えられている。

與杼神社の秋季大祭は，「與杼祭（もしくは淀祭）」として知られ，毎年11月３日（秋分の日）に行われている。かつては，西社・中社・東社の３基の神輿が氏子地域をまわり，淀大下津町の御旅所に向って舁かれていたが，桂川を渡る際には船に載せていた（船渡御）。また，御旅所までの道路が狭くて神輿がすれ違えず，神幸と還幸で順番が逆になることから，「後が先になる淀祭」と言われていたとも伝わっている。

このような神輿渡御は，昭和初期までは行われていたが，戦争の拡大とともに舁き手不足となり，中断を余儀なくされた。戦後，船渡御なしで復活するものの，昭和33年（1958）には神輿渡御自体が再び中断した。それ以降，氏子地域の自治会などが子供神輿や花笠（傘）を奉じるようになり，現在も続いている。

神輿渡御の復活は，平成７年（1995）になって，祭礼前日の夜に地元の青年らによる手づくりの「ちょうちん神輿」が練り歩くようになったことを契機とする。老朽化が著しかった神輿の修理が進められ，平成14年（2002）には45年ぶりに１基が祭りに出せるようになり，神輿渡御が復活することとなった。その後，平成16年（2004）に２基目が加わり，平成21年（2009）には３基がそろって神輿渡御に出るようになった。現在では３基の神輿が毎年異なったルートで氏子地域を巡った後，府道13号京都守口線（旧京阪国道）と府道204号，さらには千本通など６つの道路が交わる納所交差点に集結し，そろって辻回しを行なうのが見どころとなっている。

（今中崇文）

與杼神社の境内

大下津会館に飾られた花笠

納所交差点での辻回し

〔実施時期〕　11月３日（秋分の日）
〔実施場所〕　與杼神社及びその氏子区域
〔伝承組織〕　與杼神社神輿保存会，與杼神社神輿会
〔文 化 財〕　未指定

市原の秋祭と俵神輿の製作

京都市左京区静市市原町

市原は，鞍馬川と静原川の合流地に開けた，鞍馬街道沿いの集落である。8月16日に，ハモハ踊（念仏踊）に続いて近世に流行した鉄扇踊，そして江州音頭が踊られることで知られ，「市原ハモハ踊・鉄扇」は京都市の無形民俗文化財に登録されている（国選択無形民俗文化財「市原の盆踊」）。

市原の産土神は大神宮社（上の宮さん）と厳島神社（下の宮さん）で，厳島神社の例祭は11月3日である。明治中頃までは春祭だったが，後に10月23日となり，平成６年（1994）からは晴天の多い11月3日になった。

10月最終日曜日，午前9時から厳島神社で俵神輿が作られる。藁で薦を編み，俵を３つ作る。俵にはその秋に獲れた籾米を詰め，大棒がついた輿に載せる。11月１日午後７時から神輿を飾り，約10mの竹の先の藁束に３本の御幣を挿したものを厳島神社の境内の西南隅に立てる（御幣立て）。

11月3日は朝から，大神宮社の隣の宮寺で神饌を調える。正午にお祓いをうけ，触れ太鼓を先頭に、宮司、当班長（４班で輪番）に続き、四角形の曲物２つ（一ノ臈児と二ノ臈児），藁ツトを被せた桶（一和尚桶），丸い曲物６つに入れた神饌を御供物持（小学生の女子９人）が頭上に載せ，若中（青年男子）が支える。その後ろに稚児行列，神事委員らが続く。行列は鞍馬街道を南下し，下の道を西に，次の十字路を南下して上の道を東に行き，鞍馬街道を北上して厳島神社へ向かう。社頭で神事の後，午後１時30分頃に子供の樽神輿，15分後に大人の俵神輿が出発し，氏子地域を練ってまわる。午後３時頃，２つの神輿が厳島神社の拝殿に安置されると，一臼あたり３升の餅を搗く。まず女性９人で搗き，小餅にして参集の人々に配る。この一臼めの餅を「チリの餅」という。その後，９人の男性で餅を２回搗き，同様に小餅にして振舞う。

11月5日は「御幣おろし」で，午後７時から御幣と神輿を片付ける。籾米は，それを提供してくれた人に返す。

この例祭は，昭和28年（1953）頃までは夜中に童女が神饌を捧げる神事として行われ，神輿の巡行はなかったが，昼の行事になったのを機に俵を手作りして神輿を作るようになった。京都市でも珍しい俵神輿の製作技術が，今も市原の人々によって継承されている。（福持昌之）

俵神輿の製作

神饌の頭上運搬の形式を伝える御供物持

餅搗き（一臼め）

〔実施時期〕　11月3日（本年は中止）
〔実施場所〕　宮寺，厳島神社，
　　および氏子地域
〔伝承組織〕　市原神事委員会
〔文 化 財〕　未指定

松原中之町のお火焚き

京都市下京区松原中之町

松原中之町は，松原通を挟んで広がる両側町で，町の中央を南北に富小路通が通っている。江戸時代の祇園祭山鉾行事は，各山鉾町が「寄町」と呼ばれるいくつかの町からの支援を受けて運営されていたが，松原中之町は長刀鉾町の寄町のひとつであったことで知られる。昭和31年(1956)に巡行コースが変更されるまで，山鉾巡行の当日(７月17日)に長刀鉾が町内に差し掛かると，町中一同が出迎え，水たての抹茶で饗応するならわしであった。巡行ルートの変更により山鉾が松原通を通らなくなると，「古式一里塚神饌」として，長刀鉾の稚児が７月14日に町内を訪れることになっている。

松原中之町のお火焚きは，毎年11月上旬から中旬にかけてのいずれかの日に，古式一里塚神饌と同じく，町会所(「祇園床」と呼ぶ)で行われる。祇園床は町内の古くからの住民で組織される「松中会」が管理しており，現在では営業されていないものの，理髪店が置かれている。奥庭には「頓宮祇園社」が祀られており，庭に面した座敷で行事が営まれる。日程は，町内会と神事を執り行う八坂神社の神職との相談の上で決定される。

当日は午後１時ごろから準備が行われる。町内会で用意した供物にあわせ，参列者が持ち寄ったものが，三方に載せられて社に供えられる。令和元年(2019)には，紅白の鏡餅やお火焚き饅頭，おこし，みかん，するめ，大根，人参などが供えられていた。

八坂神社から神職(２名)が到着し，準備が整うと，神事の開始となる。祝詞奏上の後，「火焚きの儀」として，神職によって社の前で火が焚かれる。神事が終了すると，参列者によって片付けが行われ，下げられた供物を分配して解散となる。お火焚き饅頭とおこし，みかんは町内の全戸に配られる。

(今中崇文)

〔実施時期〕　11月上旬から中旬
〔実施場所〕　町内にある会所「祇園床」
〔伝承組織〕　松原中之町町内会
〔文 化 財〕　未指定

頓宮祇園社と当日の設え

お火焚き饅頭とおこし

神事の様子

山科義士まつり

京都市山科区

『仮名手本忠臣蔵』の「山科閑居の段」の舞台である山科は，赤穂事件ゆかりの地としても知られる。浅野家筆頭家老の大石内蔵助良雄が隠棲したとされる岩屋寺（曹洞宗）のほか，四十七士の処分について将軍綱吉に意見した公辨法親王ゆかりの毘沙門堂（天台宗），大石内蔵助を祀る大石神社（昭和10年創建），浅野家菩提寺の瑞光院（臨済宗大徳寺派，昭和37年，堀川鞍馬口から移転）などがある。

昭和31年（1956）11月18日，翌19日の国鉄（現JR）東海道線の電化（京都～米原間）を祝い，山科商店街連合会によって忠臣蔵四十七士の行列がおこなわれた。供奴を従えた総勢80名が大石神社を参拝した後，商店街を練り歩き，吉良邸に見立てた来迎寺（浄土宗西山禅林寺派）へ討ち入った。

昭和49年（1974）12月14日，山科商店会連合会は冬のボーナス商戦のイベントとして，また人口が増え続ける山科の新しい住民に地域の歴史を知ってもらう機会として義士行列を再興した。その翌年（1975）からは山科保勝会の主催で第１回山科義士まつりが行われ，平成４年（1992）に区内13の自治連合会，山科区地域女性連合会，山科経済同友会，山科区役所による山科義士まつり実行委員会に引き継がれた。以来，区民あげての行事として親しまれ，令和元年（2019）に45回目を迎えた。

行列の日の朝，大石内蔵助ら数名が瑞光院を参拝し，槍を手に毘沙門堂へ集結した義士隊は，勝ち鬨をあげて出発する（午前10時）。山科駅前で子ども義士隊らと合流すると，総勢300人を越える行列となる。行列の次第は，実行委員及び宰領（裃姿），婦人列（瑤泉院，おかる，おりく，戸田の局，寛平），宰領（裃姿），義士隊（表門隊24名），舞踊列，宰領（裃姿），義士隊（裏門隊23名），子供音楽隊，子供義士隊の順。東部文化会館の舞台では討入りの場面が演じられる。午後からは，表門隊が槍先に吉良の首を掲げて練り歩く。大石内蔵助らが岩屋寺で本懐を遂げたことを報告した後，義士隊は大石神社に到着し，参拝する。（福持昌之）

〔実施時期〕　毎年12月14日
〔実施場所〕　山科区内（毘沙門堂～大石神社）
〔伝承組織〕　山科義士まつり実行委員会
〔文 化 財〕　未指定

毘沙門堂から出発

勝ち鬨を見学する園児

吉良上野介の首を掲げる義士隊

井上頼寿資料と伏見稲荷大社 大山祭

京都に住み，関西の祭りを丹念に調査した井上頼寿（1900～1979）は，昭和４年（1929）１月５日，伏見稲荷大社大山祭に行った。この記録は彼のノートである『京の山』No.８（神祇特集）に記される。

この祭祀は現在も１月５日に行われている。まず正午より同社本殿での祭祀が行われる。その後，神職が稲荷山の御膳谷奉拝所へ行き，酒をそそいだ土器を御饌石の上に奉る。御膳谷奉拝所での祭祀は「山上の儀」と呼ばれ，午後1時半頃から行われる。直会ののち，稲荷山の七神蹟を巡拝する。

『京の山』No.８によれば，井上頼寿は同日，正午ごろ，伏見稲荷大社の本殿前を通り，稲荷山へ登った。他に登る一般の人々は，たいてい下駄を履いており，靴を履く人もいた。また，茶屋では草履を出しており，これは売っているのであって，貸してはいないだろうと書いている。

さて，先に到着した頼寿は，午後１時半ごろからの祭祀の様子を記録している。人が多く，祭祀の様子を詳しく見ることはできなかったようで，酒をそそいだ土器を神職が御饌石の上に供えた後，荒くれ男たちが奪い合ったことを中心に記録している。なお，この奪い合いは，現在は行われていない。

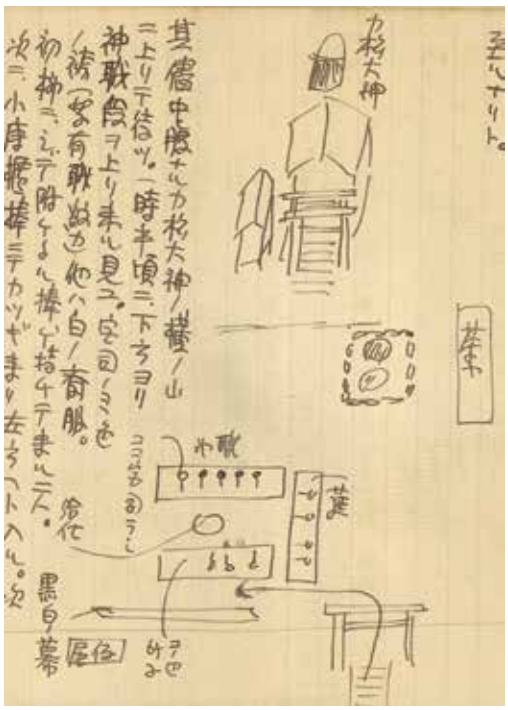
奪い合いの中では怪我もあったようである。彼の著書である『京都民俗志』（西濃印刷株式会社岐阜支店，1933年）※では，「ラグビーを見る様な壮観である」とし，伏見稲荷大社が刊行する『朱』４号（1968年）に執筆した「大山祭」では，大山祭の「勇しい様子が見られ，如何にも酒所の伏見らしい郷土色が溢れている点」に心を引かれるとする。

このように，土器を奪い合う理由について『京の山』No.８は，伏見の蔵元（酒屋）が酒を作るとき，腐りかけてもこの土器を入れれば，それを防ぐことができると参詣者が確信しているためである，と記す。

この奪い合いが終わると，神職たちはコの字に筵を敷いて直会を行う。それまでは多くの人がいたが，この頃には少なくなり，近寄ることができたと頼寿は記している。この後，神職たちは植物の「ひかげのかずら」を輪にしたものを首にかけ，御膳谷奉拝所をあとにしている。

※のちに『改訂 京都民俗志』（東洋文庫129，平凡社，1968年）。

御饌石



大山祭　見取り図

いずれも『京の山』No.８（國學院大學所蔵）

祭祀の後，御饌石には木の柵が設けられるが，その中を覗いて，土器の破片を探す人もおり，あると今年は良いことがあるとたいへん喜び，白い紙に包んで持ち帰ったようである。

頼寿は，この御膳谷奉拝所の御饌石を神が現れた(影向した)石であると考えていた。『京の山』No.15(昭和４年１月10日～11月８日)には，

影向石　御旅ニ石アル処
神影向ノ石

- 棚倉村和支社ノ影向ノ地・シヘイ屋敷〔和支明神腰掛岩〕
- 松尾ノ明神ノ影向石(西芳寺ノ中ニアリ)(水アリ)〔松尾明神影向石〕
- 八瀬ニモアリトノ記アリ〔不明〕
- 上賀茂御生所ニモアリシト云フ〔上賀茂影向石…今所在が明かでない〕
- 稲荷神社(現在の伏見稲荷大社)(御膳谷)〔稲荷山御膳谷の石〕
- 瓜生石(粟田ノ神輿ヲココニ置クコトニ注意)〔瓜生石〕
- 三島神社〔三島社影向石〕

御旅所ニ石アルトコロ(恐クハ影向ノ地カ)

- 山科岩屋神社〔岩屋明神影向石〕
- 八瀬天神宮(恐クハ神輿昔一ツナリシニテ，コノ上ニ置キシナルベシ)〔八瀬天神御供石〕
- 岩倉神社〔岩倉の石神ヵ〕

〔　〕内は『京都民俗志』での記載名称。

をあげる。さらに『京都民俗志』では，貴船神社鏡石も御饌石と同様であるとする。

井上頼寿は，数多くの祭りを見に行き，記録を残している。彼の研究手法は客観的な事実・資料(研究のための材料)を並べ，その比較によって，資料そのものに本質を語らせようとするものであった。粟田神社粟田祭，八瀬天満宮八瀬祭，伏見稲荷大社大山祭を見学し，祭りの中での「石」の重要性に気づいたのであろう。『京都民俗志』には，「祭石」として，神仏発現に関係がある石，影向石や神の腰掛石，神としてまつられている石などが数多く掲載されており，これらも京都府の祭りと密接にかかわるといえる。

(大東敬明)

ひかげのかずらを掛けた神職
『京の山』No.８（國學院大學所蔵）

『京の山』No.15「御山（稲荷山）略図」
昭和４年２月初巳の日（國學院大學所蔵）
御膳谷奉拝所は力松大神の前。

竹田の延座参座

伏見区竹田内畑町

竹田の延座参座は，毎年１月８日に京都市伏見区竹田内畑町(旧丈六町)で営まれている勧請縄行事である。勧請縄(綱)とは，集落の入口などに縄や綱を掛け，村内安全や五穀豊穣を願う習わしであり，とくに近畿地方に広く分布して「勧請吊」、「勧請掛」などとも呼ばれている。竹田内畑町では，大小２つの綱を綯って集落の鬼門と裏鬼門に掛けるが，綱を綯う際に「エンザサンザ，サンザクロウでホイ」という掛け声を出すことから，この名がついたという。

現在，この行事は，先祖代々この地域に暮らす９軒の家によって行われている。このまとまりを，この地域の古い呼び名から，「丈六会」と呼んでいる。昔は16軒ほどで構成されていたが，転出などで減少してしまったため，それまでは１日で行っていたものを，前日の７日から準備に取り掛かるようになった。毎年，持ち回りで１軒が当家を務め，作業場所などを提供している。

作業は，稲藁(300束)を叩いて柔らかくすることからはじまる。柔らかくなった藁を綯い，大小の綱を作るための太縄を長短３本ずつ用意する。それ以外に，細縄と御幣，榊を用意する。細縄は４本を１組にし，御幣と榊の枝を挿したものを80組ほどつくる。これを，大小の綱には12組ずつ下げ，残りは町内に点在する「七塚」に供えるほか，各家に持ち帰って玄関先に下げる。

行事当日は，昼過ぎから竹田小学校の校庭で綱を綯う作業が行われる。校庭にあるクスノキに太縄を固定し，３本の太縄をそれぞれに持って，上述の掛け声をかけながら綯っていく。大小の綱を綯い終わると，当家まで担いで帰って仕上げの作業となる。綱の中央には，町内にある安楽寿院(真言宗智山派)で祈祷してもらった，経文などが書かれた御札が掛けられる。飾り付けが済むと，大きい綱は竹田小学校正門の向かい(鬼門)に，小さい綱は近鉄京都線の線路沿いにある用水路の上(裏鬼門)に掛けられる。　　(今中崇文)

〔実施時期〕　１月８日
〔実施場所〕　伏見区竹田内畑町(旧丈六町)
〔伝承組織〕　丈六会
〔文 化 財〕　未指定

竹田小学校の校庭で綱を綯う

綱の中央に掛けられる御札

鬼門に掛けられた勧請縄（大）

裏鬼門に掛けられた勧請縄（小）

2 南丹市の祭り行事

都々古和気神社の大護摩・火渡り

南丹市園部町熊崎

都々古和気神社は，南丹市園部町熊崎にあり，本殿後方にある不動堂を中心として３月の第１日曜日（平成７年より，以前は３月７日）に大護摩・火渡りが行われる。午後１時行事の始まりをつげる法螺貝の音を合図に，導師となる修験者が般若心経を唱える。修験者は真言宗醍醐派丹波教会の人々で行事全体を進行する。

まず，弓矢を東西南北と鬼門，護摩壇に向かって放ち邪気を祓うためため「法弓の儀」が行われる。続いて，剣で「光」の文字を切って護摩壇を清める「法剣の儀」が行われる。最後に清められた斎場へ降神を願う祭文が朗読（「願文朗読」）される。

祭壇の蝋燭によりタイマツに火が灯され，タイマツから護摩壇に点火される。火は護摩壇の底にひかれた杉の葉から檜葉に移り白煙が立ち上ると瞬く間に炎があらわれる。再び導師たちの般若心経がはじまると参詣者たちが持参した護摩木や御札が，燃え盛る炎の中に投げ込まれる。最後は「火生三昧」と呼ばれる「火渡り」の儀式がとり行われる。井桁に組まれた護摩壇を取り除き，その上に柴や薪を並べて本尊に向かって４～５ｍ程度の火床をつくる。まず，その上を裸足になった導師が両手を胸の位置で合掌し本尊に向って渡る。同様に男性の参詣者が同じ方向へ渡る。男性が渡り終えると逆方向から法剣を携えた修験者を先頭に女性の参詣者が渡る。他の地方では男女とも同方向から渡るが，丹波地方では明治頃からのしきたりでこのように行われているという。

不動堂前での行事は，この火渡りが最後となるが，社務所の中で導師たちによる「加持祈祷」が行われる。参詣者が体の具合が悪い箇所を申し出ると，呪文を唱えながら錫杖や数珠などをかざしながら体を軽く打ったりさすったりする所作を行う。参詣者は体が楽になったと社務所を後にするのである。

（井尻智道）

護摩壇に向かって矢を射る導師

燃え盛る護摩壇

火渡りのようす

〔実施時期〕　３月第１日曜日
〔実施場所〕　都々古和気神社
〔伝承組織〕　熊崎区
〔文 化 財〕　未指定

参考文献 ■園部町教育委員会・園部町文化財保護委員会編
『園部町文化財調査報告書 第２集 園部町における民俗信仰伝承』（1989年，園部町教育委員会）
■吉田清監修『図説・園部の歴史』（2005年，園部町・園部町教育委員会）

横田六斎念仏

南丹市園部町横田

六斎念仏は，平安時代中期に空也上人が民衆教化のために始めたとされる踊り念仏で，鉦や太鼓を打って囃すものである。現在も京都市内を中心に各地に残っており，南丹市内では園部町横田のほか，八木町美里でも行われている。

横田六斎念仏は，毎年８月10日に行われる西福寺の施食会で演奏される。また，８月14日には横田及び園部町内の河原町，上本町，本町，宮町区内の初盆をむかえる家を巡り演奏を行っている。天保６年(1835)に太鼓を新調した記録があることからこの頃にはすでに活動していたことがわかる。明治18年(1885)に再興，昭和32年(1957)に再々興し，同36年まで活動した記録も残る。その後も後継者不足により中断されていたが，平成７年(1995)から当時の講員からの指導をもとに練習を始め，平成９年に再開された。

楽器の構成については，太鼓は６人，小ブチ１人，大ブチ５人に分かれる。小ブチのことをオヤともいい，熟練した長老が務めて太鼓の地のリズムを叩く。小鉦・大鉦は，１人ないしは２人で行う。演奏の並びは右端に小ブチ，その横に大ブチ，小鉦，大鉦の順に並ぶ。念仏は玄関前や庭などで行うが，家にあがって仏壇の前で行うこともある。

確認できた曲は，「花ふり」「みから」「かいじ」の３曲だったが，「かいじ」については，復活途中に古老が亡くなったため廃曲となった。「花ふり」はオヤのソーレの掛け声で始まり，最後にオヤが「光明遍照十万世界念仏衆生摂取不捨」と経文をあげ，最後に太鼓の鋲にバチをあて一周させた後，太鼓をひとつ叩いて終了する。「みから」も同様であるが，これには経文が入らない。どちらの曲も途中で，太鼓を顔の横に掲げて叩く所作と横にぶら下げて叩く所作があるが，動作は比較的小さく，京都干菜寺系の流れをくむ六斎念仏と思われる。

（井尻智道）

演奏のようす

初盆をむかえた家の前での演奏

太鼓の地のリズムを叩く小ブチ(手前)

庭先で演奏するようす

参考文献 ■ 原田三壽「横田の六斎念仏」
(『京都府の民俗芸能』2000年，京都府教育委員会)
■ 吉田清監修『図説・園部の歴史』
(2005年，園部町・園部町教育委員会)

〔実施時期〕 ８月10・14日
〔実施場所〕 横田区，西福寺ほか
〔伝承組織〕 横田六斎念仏保存会
〔文 化 財〕 未指定

川辺四社の神幸祭

南丹市園部町川辺地区（高屋・船岡・大戸・越方）

10月の第２土曜日(平成８年頃までは10月15日)川辺地区の春日神社(高屋)，月読神社(船岡)，武尾神社(大戸)，若宮神社(越方)の４社が集まり，例祭と神幸祭が行われる。各社の例祭が終わった後，正午になると春日神社より「七度半の使」と称する御幣持と紋付袴の正副使の３名が月読神社に参拝し，祭始めの礼を述べて神輿のお迎えを告げる。使者が帰ると，月読神社では御旅所への渡御準備が始まる。御旅所への行列は，榊，御幣，鉾，剣，長刀，太鼓，弓的，警固(神輿の前後)，神輿，鞍掛，御膳，氏子，一般の順で行われる。春日神社の前では春日・武尾神社の神輿が待ち構え，月読神社の神輿が到着すると，それぞれの神輿を頭上まで３回差し上げ出会いの挨拶をかわす。３社の神輿はそれぞれ新庄堰下流の御旅所へ向かい，御旅所へ着くと，大堰川対岸の若宮神社の神輿と出会いの挨拶を交わす。この時それぞれの神輿を頭上まで３回差し上げ，神輿を揺らし歓声を上げる。

御旅所は河川改修まで高屋の政ケ糸にあったが，度重なる水害のため新庄堰の東(下流側)に移動した。以前は，月読神社から大堰川を船で下ったこともあったという。また，昭和25年(1950)頃までは，川を渡っての渡御も行われており，４社の神輿が並んでの祭礼は大変賑やかだったという。大堰川改修後の現在は，川を挟んで３社と１社に分かれての祭礼となっているため，岸を隔ててそれぞれ祝詞が奏上され，直会となる。直会が終わると，角力と射礼が奉納される。

角力は春日神社，月読神社より１名ずつと行事(警固)１名で行われる。取組は，双方が向かい合い右掌を下向き，左掌を上向きで握り，左回りに７回半回る。回る際には，半回転ごと行事は扇を中央に差し，力士は蹲踞し，お互いに礼を行う。最後の取組は半開きの扇が上下に振られ，引き分けで角力が終了する。続く射礼には弓番と的番があり，弓番が舷に上がり射手となる。的は３面あり左側に１・３面を的番が，右側に２面を弓番がそれぞれ持つことになっている。射手は1面から順に７回的を射，これを２回繰り返し，最後に最初の的を射て終わる。これらの奉納が終わると４社の神輿を頭上まで３回差し上げ，別れの挨拶を交わし，それぞれの地域に戻り町内を練る。

(井尻智道)

御旅所へ向かう月読神社の一行

春日・月読・武尾神社の神輿が出会いの挨拶をかわす

角力のようす

射礼のようす

〔実施時期〕　10月第２土曜日
〔実施場所〕　高屋春日神社ほか
〔伝承組織〕　川辺地区の氏子
〔文 化 財〕　未指定

参考文献

- 『ふるさと史 大堰の流れ』(1986年，川辺小学校百周年記念実行委員会)
- 吉田清監修『図説・園部の歴史』(2005年，園部町・園部町教育委員会)

生身天満宮神幸祭

南丹市園部町美園町

秋祭は毎年10月の第３日曜日（平成13年までは10月15日）に行われる。稲の収穫が終わり，神の恩恵に感謝し，次の年の豊作を祈願する最も大切な祭りである。祭りの中心は祭礼行列と神輿の巡行となっている。

この祭りは，園部藩第４代藩主小出英貞が神輿を奉納した享保15年（1730）にはすでに催行されており，この頃，神輿は城内のみを巡行していたとされる。神輿巡行に祭礼行列が加わったのが，寛延３年（1750）に園部藩第５代藩主小出英持が道具一式を奉納して開始したとされる。この行列のようすは，「生身天満宮祭礼絵巻」に描かれるように城下の五か町（裏町＝現若松町・上本町，本町，新町，宮町）の屋台が後方に加わり，笛や太鼓，三味線などを用いて囃すなど趣向を凝らしたものであったようだ。また，この絵巻の他に祭礼の役付けや巡行ルートを記した古文書も現存しており，藩士や庄屋・年寄などを含め総勢400人を超える人々が参加していたことがわかる。昭和30年代に撮影したと思われる記録写真には，太鼓，警固，五色旗，鉾，弓矢，刀，宝物，稚児行列，神輿などで行列が構成され，総勢200人を超えていたことが確認できる。

神輿・行列の巡行ルートについては，午前10時30分に天満宮を出発，栄町・小桜町・宮町・上本町・本町・新町・若松町・本町・美園町を通る。途中，御旅所（上本町・稲荷神社前）で神事を行い，数回の休憩をはさみながら午後４時頃には天満宮へ戻ってくる。この行列は，猿田彦を先頭に神輿，榊，宝刀，弓矢，宝箱などの祭礼道具を，裃を身につけた諸役が持ち歩く。そのかたちは縮小されてはいるが現在に引き継がれている。また近年は，学生などの担ぎ手による神輿巡行や地域の団体と協力して「園部ヨサコイ踊り」が一部区間行列に加わるなど，祭りを後世に伝える取り組みの一つして注目される。

（井尻智道）

祭礼行列のようす

行列に加わる園部ヨサコイ踊り

御旅所での祝詞奏上

参考文献

- 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り―風流の開花』（2001年，白水社）
- 園部文化博物館秋季特別展図録『生身天満宮宝物展』（2002年，園部文化博物館）
- 吉田清監修『図説・園部の歴史』（2005年，園部町・園部町教育委員会）

〔実施時期〕　10月第３日曜日
〔実施場所〕　生身天満宮ほか
〔伝承組織〕　生身天満宮氏子会
〔文 化 財〕　未指定

摩気神社神幸祭

南丹市園部町船阪

摩気神社の神幸祭は，10月の第３土・日曜日を中心に行われる（平成15年までは10月14・15日）。摩気神社は江戸時代以降，摩気郷11か村の総鎮守であり，これらの神社を氏神とする人々の奉仕により神幸祭は行われる（現在４か村は不参加）。

祭りのメインは２日間になるが，初日は早朝の宍人から正使副使２名による宍人献饌からはじまり，竹井地区の氏子総代らが参加する祭典が午後10時から行われる。こうした神事が終わり午後２時になると摩気神社より神輿が船阪のお旅所に向けて出発する。途中で仁江の稚児行列と合流し，仁江にある蛭子神社の拝殿に神輿を安置する。ここで神事を行った後，再び船阪のお旅所を目指す。お旅所の近くで船阪の稚児行列の出迎えを受け，合流する。一行はお旅所到着後，神輿の安置と俵の奉納を行う。昭和７年頃までは，横田の若宮神社からもお旅所への渡御があり神輿を並べで一晩同宿したという。

翌日，午前２時からは「練り」や「角力」などが行われる。この行事は竹井・仁江・船阪・宍人・大西・半田の人々が参加する。この行事を取り仕切るのは「沙汰人」と呼ばれる役で，宮司の指示を受け行事の進行を行う。「練り」とは泥鰌捕りのことで，沙汰人・竹井・半田の順で，滑稽に演じられる。次に角力の取組が７番行われる。角力には出角力と待角力があり，出角力は勝ち役，待角力は負け役をそれぞれ演じる。この取組にも以前は11か村から参加があったが，参加のない地区は竹井が代役を務める。次に１人で角力をとる「半角力」が行われる。これは一人角力とも言われ，目に見えない稲の霊を相手に角力をとり負けることで神慮を慰めて，五穀豊穣を祈るのである。最後に再び「練り」が行われて夜の行事は終わる。

夜が明け，午後２時から仁江の稚児・当番，船阪からは宮司を稚児行列に含めてお旅所へ参集してくる。ここで「お千度」と「流鏑馬」が行われる。お千度は沙汰人を先頭に仁江・船阪の一行が幣束・弓・的・俵・折櫃などを持ち，宍人と大西の当番は鋤と鍬と馬鍬を持つ。続いて２頭の牛（張子）なども加わりお旅所内の仮殿などの周囲を３周する。お千度が終わると流鏑馬が行われる。仁江・船阪の稚児がそれぞれ持参した幣束を神輿の前で左右に振り，ついで稚児は木馬に乗り，的持ちが掲げる的３つを弓矢で射る。流鏑馬が終わると神輿はお旅所を後に摩気神社へと向かう。

（井尻智道）

神輿の巡行

角力のようす

流鏑馬のようす

〔実施時期〕　10月第３土・日曜日
〔実施場所〕　摩気神社ほか
〔伝承組織〕　摩気神社の氏子
〔文 化 財〕　未指定

参考文献

- 大野啓「生活領域と地域―京都府船井郡園部町竹井民俗調査報告」（『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』2001年，佛教大学校地調査委員会）
- 吉田清監修『図説・園部の歴史』（2005年，園部町・園部町教育委員会）

大送神社の綱引き

南丹市八木町日置

八木町日置にある大送神社では，毎年１月17日（近年は１月17日に近い日曜日）に綱引き神事が行われる。当日は綱引きに先立って，的を目がけて矢を射る神事もあわせて行われる。この一連の行事は，日置に９つある組が輪番制で当番を務め，毎年新しくする弓の的と綱引きの綱づくりなど作業を行ってきた。しかし，綱については平成20年（2008）から化学繊維のものを使用している。的は竹ひごを用いて格子状に綱み，その上から和紙を貼り，その紙に墨で三重の円を書く。これは大蛇の目を表すといわれている。綱は，昔この村で村人を困らせた大蛇を表しているといわれ，弓で的を射抜くのは，大蛇の目を射ることだと伝えられている。

夕刻になると，当番組の役員が綱・的・矢を持って大送神社へ参集し本殿に参拝する。当番組の到着に合せて鳥居の前で神事係が太鼓を打ち始めるとその音を聞いた村人たちが神社に集まりはじめる。まず，組長は鳥居横でとぐろ状に巻かれた綱に的を立て掛け，それを目がけて弓を射る。弓は３回射る習わしで，初めの矢は的をはずれ，次の矢は的の隅に当たり，最後の矢が大蛇の目に見立てた的の中央を射ぬくことになっている。

弓を射る神事が終了すると，次はいよいよ綱引きが行われる。鳥居の真下が中央になるように綱が南北に置かれ，当番組の組長が中央で見守るなか，太鼓の合図で一斉に綱引きが始まる。本来は，村を東西に走る府道より北に住む人は綱の北側，府道408号郷ノ口室河原線より南に住む人は綱の南側を引くことになっていたが，近年は集まってきた人数のバランスを考えて，南北に分かれて綱を引いている。綱引きはあわせて７回行われ，４勝した方が勝ちとなる。勝敗は中央にいる組長の判断で決まる。綱引きの勝ち負けはその年の作物の作柄を表すといわれ，北が勝った年は麦が豊作，南が勝った年は米が豊作になるといわれている。

このように，年頭の時期に的を目がけて弓を射，また綱を引き合うことは，一般には小正月に無病息災や五穀豊穣を祈願して行われる，いわゆる「予祝行事」に相当する。特に綱引きはその年の作物の豊凶を占う，いわゆる「年占」の意味があるといえる。

（井尻智道）

大送神社へ向かう組長たち

太鼓を打つ神事係

的を射る組長

綱引きのようす

〔実施時期〕　１月17日に近い日曜日
〔実施場所〕　大送神社
〔伝承組織〕　日置区
〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財
（平成14年3月26日登録）

参考文献

- 原田三壽「大送神社の綱引き」（『京都の文化財 第20集』2003年，京都府教育委員会）
- 『図説 丹波八木の歴史 第１巻 考古・地理・文化財編』（2012年，八木町史編集委員会）

西光寺六斎念仏

南丹市八木町美里

八木町美里の西光寺では，毎年８月20日と23日の両日（近年は23日の直前の日曜日），本堂（阿弥陀堂）において六斎念仏が奉納される。西光寺は真言宗高雄山神護寺の末寺で，往年は七堂伽藍をはじめ多くの坊を擁した壮大な境内を形成していたとされる。しかし，度重なる兵火によって，かつての壮観なさまを今は見ることができない。

西光寺の六斎念仏は，正徳５年（1715）の銘を持つ鉦が現存することから，近世中期には行われていたことがわかる。以後今日まで，300年以上の間，八木町美里（旧神田・広垣内・雀部の３地区）に伝えられてきたものだといわれている。戦後中断されていたが地元の人による六斎念仏保存会が結成され，昭和60年には，京都府無形民俗文化財に指定された。

六斎念仏は夜８時から本堂である阿弥陀堂で行われる。８時前になると堂内の外陣に浴衣姿の六斎念仏保存会の人々が鉦と太鼓を手に現れる。それぞれの準備が整うと，住職に合わせて関係者・観客全員で般若心経を唱え，その後六斎念仏が始まる。西光寺の六斎念仏は本尊を背に２，３人の鉦方が座って導師を務める。親太鼓２人が導師の左右に立ち，10人前後の鼓手が鉦方に対して馬蹄型に並び立つ。もともと太鼓は若衆，鉦は太鼓の親役を終えた年長者の役とされており，太鼓だけでも10人以上で構成されていたという。演じられる曲は前奏の「六鼓」と後奏の「花振り」と呼ばれる。途中10分ほどの小休憩を挟んだ後，２度目の演奏を行い，最後に御詠歌をあげる。「六鼓」と「花振り」の基本構成は同じであるが，太鼓の持ち方が「六鼓」では下げ持ち，「花振り」では受け持ちとなる。太鼓は胴に柄をつけたものを浴衣の帯付近に持ちあげ，やや腰を曲げ，長い房のついたバチで房を丸く大きく振りまわしながら打つのが特徴的である。六斎念仏には念仏主体のものと，芸能化の著しいものとあるが西光寺の六斎念仏は前者にあたる。念仏主体のものとしては，よくまとまっており，典型的な伝承として重要である。（井尻智道）

西光寺での演奏

地蔵盆での演奏

導師を務める鉦方

〔実施時期〕　８月23日の直前の日曜日
〔実施場所〕　西光寺
〔伝承組織〕　西光寺六斎念仏保存会
〔文 化 財〕　京都府指定無形民俗文化財
（昭和60年５月15日指定）

参考文献 ■「西光寺六斎念仏」『京都の文化財 第３集』（1985年，京都府教育委員会）
■『図説 丹波八木の歴史 第１巻 考古・地理・文化財編』（2012年，八木町史編集委員会）

幡日佐神社・大送神社 秋祭り

南丹市八木町氷所・日置

八木町日置の大送神社と近接する八木町氷所の幡日佐神社の両社が合同で行う秋祭りの中で「夫婦神事」と呼ばれる儀礼がある。この祭りは，毎年10月21日の秋祭りに行われ，日置と氷所の間で水争いが絶えなかったことから，仲違いをやめ，両村が協力しようと始まったものと伝えられる。

午後12時半頃，男性の神を祀る幡日佐神社から，御幣を先頭に宝剣，名代（使者）を乗せた馬２頭と飾り鉾２本を持った行列が，女性の神を祀る大送神社に向けて出発する。大送神社までは最短の道を通るため，険しい道や野道も通ることになる。午後１時半頃，大送神社に一行が到着すると，幡日佐神社から「七度半の使い」が送られ，女性神である大送神社に嫁の貰い受けを懇願する。求愛の所作は３回半（本来は７回半）行われ，最後は婚姻が成立し直会となる。直会で両氏子が盃を交わした帰路は，幡日佐神社の行列に御幣と宝剣，馬１頭と飾り鉾を持った大送神社からの嫁入り行列が加わり，幡日佐神社まで戻る。嫁入り行列は，祝福を兼ねているため，本道を大きく回り，参道から幡日佐神社に入る。最初の馬は宮司，２頭目は大送神社側，３頭目は幡日佐神社側となっている。この行列は，午後３時頃に幡日佐神社に到着し，同社で神事が行われ夫婦神事は終わる。

夫婦神事が終わると，馬駆けと流鏑馬の準備が慌ただしく参道で行われる。馬駆けと流鏑馬に使われる馬は１頭で，どちらも幡日佐神社の参道で行われる。流鏑馬は「早稲」「中稲」「晩稲」に見たてた３か所の的に馬上から矢を射て，当てた的で稲作の豊凶を占う。３つの的は，参道の法面で氏子が持ち，その場で構える。流鏑馬は，３空３的１空の計７回行われ，「空」は，矢を射ず，馬が駆け抜けるのみ，「的」は矢を射ることである。昔は，ゆっくり馬を走らせ，的の前で，矢を的に当てたそうだが，現在は馬を操るプロが行っている。馬駆けと流鏑馬は約30分で終了する。　（井尻智道）

婚姻成立後，直会のようす

嫁入り行列のようす

流鏑馬のようす

〔実施時期〕　10月21日
〔実施場所〕　幡日佐神社・大送神社
〔伝承組織〕　氷所・日置区
〔文 化 財〕　未指定

参考文献
■『図説 丹波八木の歴史 第１巻 考古・地理・文化財編』（2012年，八木町史編集委員会）

田原の御田

南丹市日吉町田原

毎年５月３日，南丹市日吉町田原の多治神社拝殿でその年の稲の豊作を予め祝う御田という行事が行われる。御田は，御田植とも呼ばれ，作太郎・作次郎と呼ぶ２人の立人が中心になって，「日柄改め」から「刈終い」までの稲作の過程を15の次第に分けて模擬的に演じるもので，少年による牛の田鋤きや４人の少女による早乙女の田植えなど所作が具体的な場面もあるが，全体としては立人２人による軽妙で即興的な対話で進行する。また，田植えの場面は昼前の作業と昼休み後の作業に区切られ，大勢の歌い手によってそれぞれ決まった田植え歌を歌う。

祭礼当日，菖蒲と蓬を屋根に飾り，古式にしたがって粽を調進するなど準備が調うと諸役が拝殿に集まり，御田が始まる。「日柄改め」「籾種揃え」「池さらえ」「種漬け」「種上げ」「苗代つくり」の順に進む。「苗代つくり」は“畦ぬり”と“水戸切り”があり，水戸を切る所作を行った際，「味噌酒の匂い，金銀の匂い，銭米の匂い，糸綿の匂い」という決まり文句がある。そして，「種蒔き」「鳥追い」「牛買い」「田鋤き」「苗取り」「田植え」「見回り」「刈入れ」の順に進み，「刈終い」で全15演目を終える。途中，牛と早乙女が加わるほかは立人の会話によって進行し，会話は決まり文句を除いてすべて即興で，所作をまじえて狂言風に演じられる。「鳥追い」では嫁と姑に分かれ，呼びに来た嫁に気づかず姑が鳥追いの退屈まぎれに悪態をつき，「牛買い」では博労と取り引きしながら，逆に値をつりあげて高値で手打ちしをて笑わせる。「田植え」では，菖蒲を早苗に見立てて田植えの様子を演じるが，その際に歌われる田植え歌は中世歌謡の雰囲気を色濃く残す古風なもので，地元に残る古文書などともあわせて勘案すると中世にさかのぼる伝承であることをうかがわせる。

このように，即興的なセリフのやりとりで進行して，かつての狂言の様子をうかがわせ，また古風な田植え歌とともに行われる田植えの次第によって芸能の変遷の過程を示し，一連の稲作作業のほとんどすべてを所作に仕組んでいるなど地域的特色を示すものとして特に重要である。

（向田明弘）

作太郎・作次郎によって演じられるようす

「田鋤き」のようす

「田植え」のようす

〔実施時期〕　５月３日
〔実施場所〕　多治神社
〔伝承組織〕　多治神社民俗芸能保存会
〔文 化 財〕　国重要無形民俗文化財
（平成12年12月25日指定）

参考文献

- 山路興造「田原の御田」（『京都の田遊び調査報告書』1979年，京都府教育委員会）
- 上田正昭監修『民俗祭事の伝統―丹波・亀岡のまつり』（1992年，角川書店）
- 星野紘・芳賀日出男監修『日本の祭り文化事典』（2006年，東京書籍）

牧山の松明行事

南丹市日吉町中世木

毎年８月24日，南丹市日吉町中世木牧山にある普門院（真言宗）の観音堂前の広場で松明行事が行われる。牧山は現在わずか数戸の山村であるが，この日ばかりは他所に出ている子や孫たちが帰郷してなかなかの賑わいを見せる。その賑わいの中心となるのが夏の夜空を焦がす松明で，松明には大松明，添松明，小松明の３種類がある。

大松明は長さ２尺７寸の松割木をネソで結束した直径50センチメートルほどの束に４メートル弱の木柱を打ち込んだもの３本を扇状に組み立てる。また，添松明は長さ２尺５寸の松割木を大松明と同様に束ねただけのもので，小松明は長さ８寸，径3.5センチメートルほどの松割木の束を葉を払った２メートル余りのマダケの枝先の先端に突差したものである。

現在，大松明，添松明は地区総がかりで準備する。大松明はもともとは３つの株と呼ばれる同族組織の頭（株ガシラという）が献じるものとされる。添松明は服忌などで献じることができなくなった際に株として献じるために５個製作され，地面にじかに立て置き燃やされる。これに対して小松明は，株ガシラ以外の各家が家単位で献じるもので，家の数だけ立てられる。株ガシラの家でも小松明の束のみ準備され，当日観音堂の仏前に供えられる。仏前のお灯明から種火を頂くためのもので，祈祷が終わるとお灯明の火をその小松明にうつし，その火を株内に分配するとともに，大松明に点火する。松明への点火などに際して鳴物も唱え言も特にないが，松明がよく燃える年は豊作だと伝えられている。

この火の行事が一区切りすると，参加者全員によるお千度が行われる。かつてはその後に盆踊が行われており，その踊りは切子灯籠を中心に輪になって踊る浄瑠璃くずしの丹波音頭で，古い時代のものを伝承していた。

この松明行事は盂蘭盆に行われる行事であるが，服忌者の参加を忌避するとともに，松明に樒の枝をとりつけるなど愛宕信仰との関連をうかがわせる。また，扇形に仕立てる大松明も南丹市美山町など周辺に点在する同様の松明行事とは異なる特色のあるものであり，株の慣行ともからむ民俗行事として貴重である。

（向田明弘）

仏前のお灯明から種火をいただくようす

大松明に点火するようす

普門院観音堂前の広場のようす

〔実施時期〕　８月24日
〔実施場所〕　普門院観音堂広場
〔伝承組織〕　牧山大松明保存会
〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財（昭和62年４月15日登録）
南丹市指定無形民俗文化財（昭和62年12月24日指定）

参考文献
- 高橋秀雄・青山淳二編『祭礼行事・京都府』（1992年，桜楓社）
- 向田明弘「丹波地域の松明行事と愛宕信仰」（八木透編『京都愛宕山と火伏せの祈り』2006年，昭和堂）

多治神社秋の祭礼とカッコスリ

南丹市日吉町田原

毎年10月15日以前に近い日曜(かつては10月15日)，南丹市日吉町田原の多治神社で秋の祭礼が行われ，カッコスリと呼ばれる踊りが奉納される。氏子地区は彰徳，興風，和田，新，片野，駅前(田原駅前)の６地区で，上田原(彰徳，興風)と輪番と呼ばれる下田原(和田，新，片野，駅前)の２組に分かれ，現在は２組が一つになって秋の祭礼が行われている。

カッコスリは，胸に羯鼓を付けた稚児４人，手に鼓を持ったカッコスリ４人，榊を持ったサンヤレ４人，締太鼓を持った太鼓持ちと太鼓打ち各６人，笛６人という編成で，各区から１人ずつが担当する太鼓と笛以外は上田原と輪番が半分ずつ受け持つ。つまり，上田原と下田原の２組が合同でカッコスリを奉納する。宮座の古式をとどめる上田原については，その役をさらに２つに分けてそれぞれ稽古を行い，前日の宵宮に多治神社境内で初めて合同でカッコスリを行う。輪番の下田原もかつては同様に宵宮の日は御旅所に集まってカッコスリを行っていたという。

祭礼当日，宮入した一行はまず社務所において座礼(一献式)を行う。座礼の接待役は輪番の役で下田原４地区が一年交替で務める。次いで上田原と輪番が一組となって社務所の中でカッコスリを行う。これは，本番前の最初で最後の総稽古でこれをナラシという。儀礼が終わると本殿で祭典があり，その後境内でカッコスリの奉納となる。

カッコスリは，稚児が互いに向かい合って中央に立ち，その周囲を鞨鼓すりが鼓をすり打ちしつつまわり，その輪の外側の四隅にサンヤレが立って手に持つ榊を振りつつ音頭を歌う。そのかたわらでは，太鼓持ちと太鼓打ちが向き合って横一列に並び，笛とともにそれを囃す。音頭は古い囃子詞をもち，「一の宮」「二の宮」の２曲がある。

神社境内での奉納を終えると，諸役の一行は神輿とともに御旅所へ向かう。御旅所でカッコスリを奉納した後，一行は氏子地区を巡り，夕方神社に戻り祭礼を終える。　(向田明弘)

社務所における座礼のようす

神社境内における
カッコスリ奉納のようす

御旅所へ向かう一行のようす

神社を
出発する神輿

〔実施時期〕　10月15日以前に近い日曜
〔実施場所〕　多治神社，同神社御旅所ほか
〔伝承組織〕　多治神社民俗芸能保存会
〔文 化 財〕　記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
(平成12年12月25日選択)
京都府指定無形民俗文化財
(昭和58年４月15日指定)

参考文献 ■『田原のカッコスリ』(2002年，日吉町郷土資料館)
■ 星野紘・芳賀日出男監修『日本の祭り文化事典』(2006年，東京書籍)

胡麻日吉神社の馬かけ

南丹市日吉町東胡麻

毎年10月第３日曜日，南丹市日吉町東胡麻の日吉神社秋祭りで馬かけが行われる。この行事は馬にまたがった役者が神社前の馬場で的をめがけて矢を射る流鏑馬を祭事として行うもので，八木町氷所などでも同様の祭事が行われている。

馬かけは，祭礼前夜に宮籠りをして「七色の膳」を共食することから始まる。夜11時，主役となる馬場量，神馬（鎧），騎手（衣），射手（女形），矢取り（稚児助）の諸役を務める５名が東胡麻区会議所（兼社務所）に集まり，梨・ぜんざい・栗・枝豆・菓子・蒲鉾・甘酒の順に数分間隔でいただく。深夜０時過ぎ，馬場量が祭礼時の衣装で日吉神社周辺に祀られる祠などを参拝する。

午前６時すぎ，諸役の５名が揃って中村の岩上池に行き禊の儀を行う。いったん社務所に戻って朝食をとり，祭礼衣装に着替える。午前８時すぎ，５名は揃って日吉神社及び境内摂社と奥の院に参った後，道案内役の総代を先頭に上胡麻，西胡麻，東胡麻の各地区に祀られている堂宇や小祠を巡拝する。参拝先には，前日までに準備したゴヘイ（御幣）を供える。ゴヘイは藁苞にゴマメと白粉を練ったシロモチを詰めて半紙で作った御幣を取り付けたもので，一行は各所で接待を受けながら十数ヵ所の聖地を約４時間かけて巡る。

日吉神社近くの地蔵堂に到着すると，堂前に設えた馬繋ぎに馬を留め，小休憩をとる。午後１時すぎ，諸役５名が社参，神事が執り行われた後，神社前の馬場に的を３か所設置する。的は３枚の板を張り合わせ，的となる部分に藁を草鞋型に編んで取り付けたもので，それぞれ警固役が立つ。まず，宮司による祭事の安全祈願が行われた後，馬場量が紅白の弓状の棒を手に馬場を祓い清める。そして，最初に騎手，次に射手，最後に神馬の順に駆け抜け，射手は５回駆けるうちに３つの的を射る所作を行う。矢取りは馬の後方を走り，的を射た矢を拾う役で，その矢は神前に供える。なお，馬場を駆けるのはそれぞれ射手が５回，騎手が３回，神馬が１回であるが，現在馬場がアスファルト舗装となっていることや，諸役と観衆の安全，そして馬の負担を考慮して疾走は比較的穏やかに行われている。

なお，この祭礼時に馬場量が身につける木製の面は，すでに廃絶した猿楽で父尉が用いる父尉面で，丹波猿楽の伝承地と隣接することからそのつながりをうかがわせる。　（向田明弘）

「七色の膳」を共食するようす

「七色の膳」

社参する諸役

射手（女形）が馬場をかけるようす

〔実施時期〕　10月第３日曜日
〔実施場所〕　日吉神社ほか
〔伝承組織〕　日吉神社馬駈け保存会
〔文 化 財〕　南丹市指定無形民俗文化財
（昭和62年12月24日）

参考文献
■『胡麻日吉神社の馬かけ神事』
（2009年，南丹市日吉町郷土資料館）

芦生のわさび祭り

南丹市美山町芦生

南丹市美山町芦生は，同町北東部，由良川源流域の深い山あいにあり，福井県境と滋賀県境に近接している。芦生にある熊野神社では，毎年４月10日にわさび祭りが行われている。芦生には昔からたくさんの熊がいたため，冬の間雪に閉ざされるとほとんどの住民が熊狩りをしていた。熊の胆嚢は「熊の胆」と呼ばれる貴重な生薬で，肉，皮，油などとあわせ高く売れた。そのため，地区の人々は狩猟の無事を祈って，正月から祭りのある４月10日までは，決してわさびを食べないことを熊野神社に誓い，熊狩りをしてきた。祭礼での献饌は，御神酒，わさびのお浸し，鯛，赤飯，餅，するめ，白菜，大根などである。わさびは生のままではなく，根がついたわさびをお浸しにしている。わさびの横にはネコヤナギの枝で作ったお箸もおかれている。わさびのお浸し以外は，他の祭礼でもよくみかける神饌である。

撤饌となると，お供えの中からわさびのお浸しが参列者にふるまわれる。いただく際はネコヤナギのお箸を使って自分の皿に取り，御神酒とともにいただく。祭礼にわさびをお供えするのは，冬期の熊狩りに対する感謝であり，今日から地元の者がわさびを食べさせていただく許可でもあるという。

我が国の民俗信仰では，山に宿り，そこに生息する動植物を所有するのは「山の神」だと考えてきた。神観念や信仰形態は，地域，職能により多様であるが，木の伐採や狩猟を始めるに際しては山の神の承認を請うとともに安全を祈願し，野獣を仕留めればその一部を山の神に献じて感謝するとともに，引き続き恵みを願うなど共通点も見られる。芦生のわさび祭りもこうした山の神行事の一例と考えることができる。祭りの名称となっているわさびだが，わさびはいくつもある神饌の一つにすぎないものの，熊狩りの無事を祈るため禁忌としたわさびが，ここでは祭りの名称へと発展している。全国的に見ても，わさびが祭りの名称となるところはなく，この点においても注目すべき行事である。

民俗行事の常で，この祭りがいつから行われていたかは不明だが，地元の古老によれば明治初期ではないかという。いずれにしても，地域的特徴をよく示す民俗行事であり，資料的な価値が高く貴重である。（鵜島三壽）

供えられたわさびのお浸し

祭礼のようす

撤饌後，参列者にふるまわれるわさびのお浸し

〔実施時期〕　４月10日
〔実施場所〕　熊野神社
〔伝承組織〕　芦生区
〔文 化 財〕　未指定

参考文献

- 大藤時彦「祭前の慎み」（柳田国男編『山村生活の研究』1937年，岩波書店）
- 中島弥栄子「年中行事」（『美山町誌 上巻』2000年，美山町役場）
- 山根京子「芦生のわさび祭り」（『山葵連合会会報 53号』2014年，静岡県山葵組合連合会）

田歌の神楽

南丹市美山町田歌

田歌区は，かやぶきの里で知られる北集落からさらに東へ７kmに位置する。田歌の神楽は，氏神である八坂神社の祭礼に行われる芸能で，毎年７月14日に実施されている。「田歌の祇園さん」とも呼ばれている。

天狗１，般若面の鬼２（子ども），かつらをつけ顔に隈取りをした奴３，ササラを持つひょっとこ１，女装で杓文字を手にするお多福１，背に樽を負い頬かぶりをしたひげ面の樽負い爺１という構成で，太鼓打ちを主とする芸能である。

太鼓を乗せた神楽堂という小さな屋台を八坂神社の拝殿に据え，その前面に筵を敷き，これを舞台にして演じられる。神楽は１，ならし　２，かぐら　３，さんぎり　４，にぎまくら　５，三人舞からなる。ならしは文字通り腕慣らしの意で，これが終わると鬼と奴が１人ずつ「かぐら」の曲を打つ。次の「さんぎり」は２人の奴の太鼓打ちに爺が絡むもので，元気のよい奴とよぼよぼした爺の対照がおもしろい。「にぎまくら」は，まずお多福が登場し，しなを交えながら芸打ちを見せる。そこへひょっとこが出てきて打ち継ぎ，さらにお多福が入れ替わり打つという曲である。これで太鼓打ちが終わり「三人舞」が始まる。三人舞はひょっとこ，お多福，爺が演じるもので，３人がこの順で登場し滑稽戯をみせる。

祭礼は神楽宿の出立ちから始まる。正午過ぎに役の者が集まり装束を着ける。支度が整うと神主のお祓いがあり，ひと囃子してから行列を組んで神社へ向かう。神楽堂を中心とする行列の先頭には神主の付添いと呼ばれ御幣を奉持する天狗がつく。次に鬼，これは道払いともいい太い青竹を引きずり歩く。次が奴で１番目が草，２番目が蕾，３番目が花と呼ばれている。毛槍をふりつつ行進し要所で奴振を演じる。その後，ひょっとこ・お多福，爺，神楽堂と続く。奉納後は，同じように行列して宿へ戻る。これで祭りは終了だが，神楽宿は祭礼の間は神楽堂を奉祠し，１年後の宿送りまで預からねばならない。宿は一種のお宿所でもある。

神楽の名を持つ芸能は府内に多くのものがあるがそのほとんどは獅子神楽である。その獅子をもたないのが田歌の神楽の一つの特色であるが，それはちょうど大神楽の滑稽芸が太鼓打ちを結びついた形態であり，そこに大きな特色がある。棚野の千両祭（美山町鶴ケ岡）とともに地域的特色を良く示すものであり，資料的価値が高く貴重である。　（高屋千晴）

要所で演じられる奴振

神社に向かう行列の様子

「さんぎり」の様子

〔実施時期〕　７月14日
〔実施場所〕　八坂神社（美山町田歌）
〔伝承組織〕　田歌区
〔文　化　財〕　京都府登録無形民俗文化財
（平成３年４月19日登録）

参考文献

- 中島弥栄子「年中行事」
（『美山町誌 上巻』2000年，美山町役場）
- 植木行宣「田歌の神楽」（『京都府の民俗芸能』2000年，京都府教育委員会）
- 「田歌の神楽」（『京都の文化財 第９集』1991年，京都府教育委員会）

川合・殿・盛郷の上げ松

南丹市美山町川合・殿・盛郷

鶴ケ岡地区の川合，殿，盛郷で行われる柱松形式の火祭り。以前は８月24日の夜行われてきたが，近年では参加者確保のため直近の土・日曜日に変更されて実施されている。

各地区により多少の差異はみられるが，特徴として松河原と呼ばれる村はずれの河原に，長さ約10～ 30mほどの柱状の大松明(サオ，神木とも呼ばれる)を立て，その柱の先端にとりつけたモジという逆円錐形の燃料部にめがけて，長さ15cm，直径７cmほどの松明を地上から競争で放り上げ，着火させ，盛大に炎上させる行事である。大松明は，川合，殿では１本，盛郷では２本立てられる。殿も昔は大・中・小の３本を立て，大は青壮部，中は少年，小は子供用であったという。現在の全高17mの松明は中相当の大きさである。

盛郷では，大松明のほかに地松と呼ばれる１本の松明を各家が自家の近辺に立てる。川合では，松河原の両岸に並べられる。

長大な大松明の先端へ松明を投げ入れるのは大変で，着火するまで絶え間なく放り上げられる松明が描く火の放物線と，あたり一帯に立て並べられた地松の火がまじり合い，まさしく火の饗宴を現出する。

神楽による囃子もあり，大きな賑わいを見せる。殿ではコウを行った公民館から松上げの会場となる河原までの20mほどの距離を男性が笛・鉦・太鼓を音頭に合わせながら打ち鳴らし，移動する。川合では笛・太鼓によるという。

この行事は先端の「御幣さん」が落下するのをもって終わりとされ，「御幣さん」が拾われると，ほどなく大松明が倒される。一行は各区の公民館(盛郷は薬師堂)へ引き上げ，御幣を床におさめ，その前で宴を開いたが，現在では同時に開催される振興会まつりへ参加するという。この集まりをコウ(川合では松講，盛郷ではオコウ，殿では愛宕講)と称し，昔は最初に松明を上げた者を正座に据え，盛大に祝いの宴をはった。

こうした柱松行事は，京都市の北部から若狭(福井県)にかけて点々と行われていた。そのほとんどが愛宕山への献火行事といわれ，「御幣さん」の竹に愛宕山からうけた祈祷札と榊を取り付けたり，上げ松の種火を当番が祀る愛宕さんのお灯明から採る，または服忌者の参加をタブー化するなど愛宕信仰との関連をのぞかせる。

(髙屋千晴)

立てられる大松明

地上から松明を放り上げ，着火させる様子

〔実施時期〕　各振興会祭りに合わせて実施
盛郷…８月25日に近い土曜日
川合・殿…８月24日もしくは，第３日曜日

〔実施場所〕　各地区河原

〔伝承組織〕　区民

〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財
(昭和63年４月15日登録)

参考文献

■「盛郷の上げ松」「殿の上げ松」「川合の上げ松」(『京都の文化財 第６集』1988年，京都府教育委員会)

芦生の松上げ

南丹市美山町芦生

柱松形式の火祭りで，以前は８月24日夜行われてきたが，平成30年(2018)ごろから24日に近い日曜日に変更されている。

松上げを行う場所をトロギバ(灯籠木場)といい，芦生の集落かかりの広げた河原に位置し，その中央に常設の木の枠がある。そこへカサと称する燃料部を取り付けた長大な檜の柱を直立させて，そのカサに火をの付けた「上げ松」を放り上げ，着火炎上させるのがこの行事である。

トロギは長さ12間(約21.6m)と決まっているが，その先端部分に添木が足されるので，その高さは22～23mにもなる。先端のカサは，逆三角錐形で上端径が１.２mほどあり，まず青竹で三角の枠を作り，そのまわりにカヤを編み付けるようにしてこしらえる。着火用の上げ松は檜の割木を重ねた径７cm弱の松明で，手尻にシナの紐(燃えにくいという)を結ぶ。この紐で松明を振りまわし反動をつけて放り上げる。また，トロギとは別に，家の周囲や道端そしてトロギ場一体に地松が立てめぐらされる。地松は上げ松と同じく各家で用意するものであり，１戸当たり25～ 30束も作られ，地面に立てた竹や木の杭に突き差して燃やされる。

カサに最初に上げ松を入れるのを一の松，２番目を二の松と呼び，カサが燃え落ちトロギが倒されたあとその場で行う祝い酒は，一の松から順に三の松までいただくことになっており，その名誉がたたえられる。その後，一行は寺までひきあげ改めて祝宴をはり，庭では賑やかに盆踊りが行われる。盆踊りは浄瑠璃口説が主体だが，かつては鉄扇，ヤッサ，ヤッサコサイなどがあったという。場所も寺ではなく寺のかたわらに在った地蔵堂の堂内で，トロギ場から伊勢音頭で囃しながら地蔵堂に練込み，村人もまじり，下駄履きのままその床上で踊り興じたといわれる。

芦生は由良川の最上流に位置する山村であり昔は，下町，口芦生，灰野の地区ごとに行っていたが，現在は芦生区として一つにまとまり，区の行事になっている。

芦生の松上げも，形態等がその他周辺の事例とほぼ共通している。その目的は虫送りとする口碑もあるが，やはり防火の願いを込めた愛宕山への献火行事とされ，この行事も火の信仰をともなって村に浸透した愛宕信仰の一事例であり，資料として貴重である。

(髙屋千晴)

松明や地松により
あたり一面火の饗宴が現出する

カサに燃えやすい杉の
葉などを入れる様子

立てられたトロギ
(灯籠木)

〔実施時期〕　８月24日に近い日曜日
〔実施場所〕　地区内河原
〔伝承組織〕　芦生区
〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財
(平成元年４月14日登録)

参考文献

■「芦生の松上げ」(『京都の文化財 第７集』1989年，京都府教育委員会)

樫原の田楽

南丹市美山町樫原

樫原の田楽が行われるのは美山町樫原に所在する大原神社の摂社・川上神社である。旧樫原村の氏神である川上神社は猿田彦命を祀る小型の社殿で，大原神社の正面向かって右側，覆屋内に鎮座する。祭礼の中で新入りのひとりが「カァ，カァ」と，からすのしぐさをすることから「からす田楽」とも呼ばれている。

この田楽は，以前は10月10日の体育の日に奉納されていたが，近年ではそれに近い日曜日に変更されている。

この祭礼には鮓講とよばれる九人衆の講があり，その九人衆が田楽を勤めるということになっている。樫原では長男が嫁を迎えるとその講員となるが，定員が９名であるため，新入りがあると古い順に１人ずつ抜けていく。最近は若者の結婚事例が少なく，九人衆も高齢化している。

この講は「鯖講」や「いに講」とも呼ばれている。当日，鯖寿司を大量に用意して振舞ったことからの別名であり，またかつては頭屋制があり，それにあたるともてなしも含め大変な入用であったことからの別名のようである。

田楽躍は，裃をつけ一文字笠を被った男性で構成される。ビンザサラ４人，太鼓４人，笛１人の９名で，最長老から順に太鼓の大・中・小とだんだん小さくなる。ビンザサラは扇子を持つ。ビンザサラで最後の一人が新入りの役とされ，これを別名「からす」と称し，この新入りのみ烏帽子を被る。からすは「カァ，カァ」と声を出しながら足をそろえて前に３回跳び，一礼しながら１歩ずつ下がる。

当日は午後１時ごろから社務所内で事前演技があり，その後，午後２時ごろから拝殿（大原神社境内内），そして囃子を打ち鳴らしながら移動し山の神の祠の前で演じられる。山の神はもともとは神社から北東へ約300m余り上った山の中であったが，近年境内に移動し祠が建てられたため，その前の地面にシートとござを敷いた簡易な祭場が設けられている。ここでの田楽が終わると，山の神への供物として「つと」とよばれる新藁に入った新米が九人衆や参加者，見学者に振舞われる。「きよもち」とも呼ばれている。つとを燃やしたのち，五社明神と呼ばれる境内の摂社へ供物を供える。この摂社は宗像宮，八幡宮，豊受宮，月読宮，天満宮である。再び川上神社本殿前に戻り，そこで３度，田楽を奉納する。これが終了すると，五社明神前で神主が苧麻の弦を張った竹の弓で的を射る行事が行われ，全体の神事が終了する。

美山町内で田楽が伝えられているのはここだけであり，府下的にみても貴重な民俗文化財の一つである。無形民俗文化財としては京都府第一号である。（髙屋千晴）

拝殿での奉納の様子

行事名の由来でもあるからすの所作

〔実施時期〕　10月10日に近い日曜日
〔実施場所〕　川上神社（大原神社境内内）
〔伝承組織〕　樫原田楽保存会
〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財
（昭和58年４月15日登録）

参考文献
■ 中島弥栄子「年中行事」
（『美山町誌 上巻』2000年，美山町役場）

棚野の千両祭

南丹市美山町鶴ケ岡

棚野の千両祭は，美山町鶴ケ岡にある諏訪神社の秋季大祭である。諏訪神社は旧鶴ケ岡19か村の氏神であり，２つの大きな祭礼がある。千両祭はそのうちの１つであり，例年は10月５日の例祭であるが，30年ごとに大祭があり，その中間の15年目に中祭と称する大祭が行われる。直近では，平成17年(2005)に行われた。大祭は５大字(高野・鶴ケ岡・豊郷・盛郷・福居)の氏子によって，地区ごとに民俗芸能が奉納される。各奉納芸の華麗さや費用をかけることから「棚野の千両祭」と呼ばれるようになったという。

奉納芸は豊郷の獅子舞を先頭に盛郷・福居は刀踊，豊郷は振踊(姫踊)，高野は神楽，鶴ケ岡は神楽と俵振りである。それらには，大太鼓による囃子が伴い，大太鼓をのせる屋台は，風流の作り物を飾る曳山の形式となっている。盛郷・福居の刀踊は，２人１組で手にする太刀やなぎなた，棒などで一方が打てば片方が受けるという左右対称的な演技を見せる組太刀型の太刀振である。豊郷の振踊は，「道行き」，「御伊勢踊り」，「長者踊り」，「小鷹踊り」，「商踊り」，「武者踊り」の６曲で，かけ踊りの形式とみられ，どれも縁起を祝うものである。また，獅子舞は，大正期から加わったものであるという。高野と鶴ケ岡の神楽は，お多福やヒョットコによる道化芸と太鼓打ちが一体となった民俗芸能である。俵振りでは最後に狐の面をつけ，「狐踊り」という，けんけん跳びがおこなわれる。

「棚野の千両祭」は，15年ごとの大祭であるにもかかわらず，毎年の祭礼でどこかの地区が芸能を特設舞台場で披露するなどして，現在まで伝承されてきた。平成３年(1991)には「諏訪神社の祭礼芸能」として，京都府の無形民俗文化財に登録された。

次回は，2020年度の大祭が延期となったため，2021年10月の予定となっている。　(山本拓人)

盛郷・福居の刀踊

豊郷の振踊り

高野の神楽

鶴ケ岡の俵振り

〔実施時期〕　10月５日頃
〔実施場所〕　美山町鶴ケ岡　諏訪神社
〔伝承組織〕　各地区の保存会
〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財
(平成３年４月19日登録)

参考文献

- 『わたしたちの美山町』
  (1980年，ふるさと美山の学習資料編集委員会)
- 阜一秀編『ふるさと美山の生活誌』(1983年，私家版)
- 中島弥栄子「年中行事」(『美山町誌 上巻』2000年，美山町役場)
- 高橋秀雄・青山淳二編『祭礼行事・京都府』(1992年，桜楓社)
- 「諏訪神社の祭礼芸能」
  (『京都の文化財 第９集』1991年，京都府教育委員会)

道相神楽

南丹市美山町宮脇

神楽の行われる道相神社は，美山町と日吉町との境界の原峠を北に約４㎞進んだ宮脇に所在する。神社はかつての野々村庄33か村の氏神で，神楽は現在美山町原，板橋，宮脇，下吉田の４つの地区の氏子で伝承され，これら４地区は別名，宮元四集落と呼ばれている。

神楽は元来，神社の屋根を葺くのが25年ごとだったので，そのお祝いとして大祭を行い神楽を奉納してきたという。厳密には25年ごとにはなっていないが，大正14年(1925)，昭和44年(1969)，と実施された。昭和53年(1978)に実施後は休止となり，そのまま廃絶の危機にあったため，宮元四集落が保存会を組織し，伝承基盤を強化する一方で三和町(現福知山市三和町)の梅田神社の獅子舞を導入し，天狗を加えるなど芸能の内容をより豊かにして平成４年(1992)に復活をした。復活後しばらくは３年ごとに実施してきたが，再び間隔をあけ，最近では平成27年(2015)に７年ぶりに奉納されている。

神楽行列は，警護，天狗，獅子，おかめ，ひょっとこ(ササラすり)，大太鼓が一体となった曳山，そして恵比寿，大黒，幟差し，俵振りの構成となっている。笛，鉦の囃子に合わせ，曳山にのせた大太鼓を子どもたちが打ち，その周りでおかめ，ひょっとこが滑稽な芸を演じる。行列の最後は，伊勢音頭にあわせて俵を振る俵振りである。五穀豊穣を願うという。

総勢100人を超える一行は，午前９時，板橋公民館に集合する。着替えや，練習を兼ねた太鼓打ちと俵振りを行う。午前10時，公民館を出発し，神社までの数㎞を１時間半ほどかけて練り歩く。おかめとひょっとこは沿道の人々に愛敬を振りまく。道中，神社近くの宮脇公民館で休憩し，再度出発するにあたり，ここから天狗と獅子が合流する。一行は神社に到着し，鳥居をくぐると，俵振りはそのまま休むことなく拝殿の周囲を踊り，曳山は拝殿横に据えられて太鼓打ちの少年が順次打ち巡る。太鼓打ちが終わると獅子舞の奉納となり，これが終わると芸能はすべて終了となり，こののち公民館での後宴となる。

同じ美山町内の「諏訪神社の祭礼芸能」(美山町鶴ケ岡)の高野や鶴ケ岡の神楽と，芸能の構成等が類似する。とくに鶴ケ岡の俵振りは明治時代に道相神社に習ったという伝承がある。もどき芸に太鼓打ち，俵振りといった特徴は京都府内でも美山町だけに見られるもので，地域的特徴をよく示す民俗芸能であり，資料的な価値が高い。

(髙屋千晴)

神社に向かって練り歩く俵振り

おかめと
ひょっとこ

天狗と獅子

境内での太鼓打ちの様子

〔実施時期〕　10月９日ごろ(大祭は不定期)
〔実施場所〕　板橋公民館～道相神社
〔伝承組織〕　道相神楽保存会
〔文 化 財〕　京都府登録無形民俗文化財
(平成11年３月19日登録)

参考文献
- 中島弥栄子「年中行事」(『美山町誌 上巻』2000年，美山町役場)
- 原田三壽「道祖神社の神楽」(『京都府の民俗芸能』2000年，京都府教育委員会)

3　伝統行事のいま

京都市内の神輿

神霊の乗り物として神輿が初めて史料に登場するのは，12世紀に成立した歴史書『本朝世紀』の天慶８年(945)7月28日条とされる。志多羅神と称する正体不明の神が神輿に乗り，摂津国から群衆とともに上洛を企てたという記事で，京は大混乱に陥ったそうである。後世の史料に，それ以前から神輿はあったという説もみえるが，信憑性は高くない。

神社に祀られた神霊を御旅所に遷して祀る形態は，神道祭祀の典型のひとつである。古くは神籬を設えて遷していたが，高貴な人が乗る鳳輦を模し，神輿が登場したというのが通説である。御旅所の初見は平信範の日記『兵範記』仁平３年(1153)４月15日条の宇治離宮祭の「御輿旅所」とされており，13世紀に成立した歴史書『百錬抄』には，平治元年(1159)11月に「祇園旅所焼亡」とあることからも，平安時代の中後期に京の周辺地域で成立した祭祀形態と考えられている。

平成５年(1993)の「全国神社祭祀祭礼総合調査」(神社本庁)によれば，京都市内で神輿渡御がおこなわれる祭の数は89にのぼる。ただし，毎年作られる造り物(樽神輿，俵神輿，瑞饋神輿など)や，町内会による子供神輿なども含まれる可能性や，鳳輦と呼ばれているものが含まれていない可能性もある。また，松尾大社の松尾祭(６基)，伏見稲荷大社の稲荷祭(５基)，八坂神社の祇園祭(３基)のように，複数の神輿が出る祭がある一方で，引退して使用されなくなった神輿もあり，祭の数と神輿の数は一致しない。

昭和63年(1988)に京都市文化財保護課がおこなった神輿アンケート調査では，270社のうち154社から回答があり，61社に97基の神輿が所有されているとわかった。それを受け，同年秋から翌年の春にかけて，特に古いと思われる神輿を対象に実地調査を行った(58社，94基)。

京都市内の年紀がわかる古い神輿

神社名（神輿名）	紀年銘等	区
御香宮神社（千姫神輿）	元禄 ７年（1694）	伏見区
晴明神社	宝暦12年（1762）	上京区
道祖神社	安永 ６年（1777）	下京区
春日神社（西組神輿）	寛政 元年（1789）	右京区
斎明神社	寛政 ９年（1797）	右京区
羽束師神社	文化 ３年（1806）	伏見区
大豊神社	文政13年（1830）	左京区
松尾大社（四之社神輿）	天保 ３年（1832）	西京区
伏見稲荷大社（中ノ社神輿）	天保 ３年（1832）	伏見区
藤森神社（深草郷神輿）	弘化 ３年（1847）	伏見区
住吉大伴神社	弘化 ４年（1848）	右京区
石座神社	嘉永 ５年（1852）	左京区
粟田神社	文久 ２年（1862）	東山区

国内で現存する神輿では，後堀川天皇の勅により石清水八幡宮勧請の際に奉送されたと伝えられる平安時代の「沃懸地螺鈿金銅装神輿」が，和歌山県の鞆淵八幡神社に伝えられており，大阪府の誉田八幡宮に伝わる鎌倉時代の「塵地螺鈿金銅装神輿」とともに，国宝に指定されている。そのほか，鎌倉時代の神輿３基が奈良，兵庫，高知に，南北朝から室町にかけて９基が福島，栃木，滋賀，奈良，和歌山に，桃山時代の１基が滋賀に伝わっており，いずれも国の重要文化財(美術品)に指定されている。

京都市内で最も古い神輿は，江戸時代の御香宮神社「千姫神輿」であり(未指定)，造り物系の「西ノ京瑞饋神輿」が京都市の無形民俗文化財に登録されている。

(福持昌之)

参考文献
- 『京都市文化財だより』第16号(1991年，京都市文化観光局文化部文化財保護課)
- 『神輿文化を考える』(2017年，国学院大學研究開発推進機構学術資料センター)

新型コロナウイルス（COVID-19）禍における地蔵盆の開催状況

地蔵盆は本来８月24日を中心に，住民が地域に地蔵を祀り，子供の健やかな成長や地域の安全を祈願する行事である。地蔵盆では読経や数珠回しに加え，福引や子供の遊び等を通じて多世代が参加・交流する。このことから近年，コミュニティ形成の場としても地蔵盆は再評価され，京都市では2013年に「京都をつなぐ無形文化遺産」第３号に「京の地蔵盆」として選定された。

2020年はコロナ禍の影響を受け，京都でも地域行事が軒並み中止・延期となった。京都府立大学住環境防災学研究室（前田研究室）では，地蔵盆の現況や今年の開催予定について把握し，開催の可否を含めて今年の地蔵盆の開催について検討している関係者と情報共有することを目的とする調査を行った。京都市文化市民局 地域自治推進室，同 文化芸術都市推進室文化財保護課の協力を得て，2020年６月下旬から８月上旬にかけて京都市内の地蔵盆開催者（町内会役員等）を対象としたアンケート調査（WEBと質問紙の両方）を行った（有効回答数：292件）。また，地蔵盆の当日（８月22日・23日）には「田の字地区」を対象とした現地調査を行い，地蔵盆の開催の有無や開催の方法を把握した。アンケートでは，全回答のうち約51%から「開催する予定である」という回答が得られた。また，現地調査では，計66件の開催を確認することができた。

行事の簡略化や参加者の分散，半屋外空間（町家のミセノマ等）の活用，祭壇の設えの簡素化など，感染防止のために様々な工夫を凝らしながら地蔵盆を開催している様子が確認できた。一方，子供たちの思い出づくりために開催したかったが，適切な感染対策が行えないため中止した例など，開催の可否をめぐる住民の葛藤や苦渋の決断の様子がアンケートの自由記述からは窺えた。

地蔵盆がコロナ禍においても柔軟に対応しており，地域コミュニティのレジリエンス（危機や変化への対応力）が発揮されている可能性が見いだせた。一方，コロナ禍を機に廃止に追い込まれる地蔵盆，逆に，新たな価値や方式が見いだされる地蔵盆等，今回の調査だけではわからないことも少なくない。ウィズ／アフター・コロナの地蔵盆と地域コミュニティの動向については今後も継続的にみていく必要がある。

（前田昌弘）

地蔵盆当日（8月22日・23日）における現地調査の結果のプロット

祠の前に簡易な祭壇を設置し，住民は時間帯ごとにわかれて参拝する

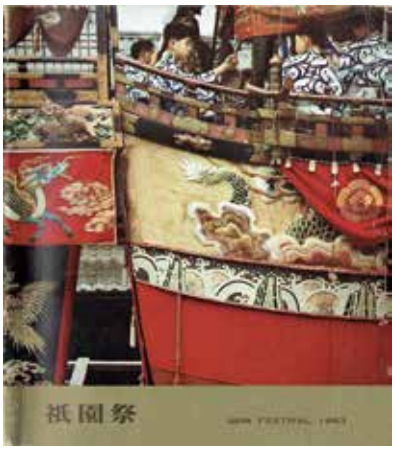
祠の前に簡易な祭壇を設置し，住民は距離を保ちながら参拝する

祇園祭“山鉾”の読みについて

―パンフレット『祇園祭』のローマ字表記から―

祇園祭には、曳山と舁山をあわせた“山(ヤマ)”24基と，曳車型の大型の鉾と傘鉾をあわせた“鉾(ホコ)”10基があり，それらを総称して“山鉾(ヤマホコ・ヤマボコ)”という。

その山鉾について「ヤマホコとヤマボコ，どちらが正しいのですか？」という問い合わせが，京都市に毎年，少なからず寄せられる。それに対しては，いずれも間違いではないとしたうえで，2009年９月にユネスコ無形文化遺産代表リストに記載された「京都祇園祭の山鉾行事」が“Yamahoko, the float ceremony of the Kyoto Gion Festival”であることと，外国人が「HOKO」と「BOKO」を違うものと誤解することを防ぐため，祇園祭山鉾連合会や京都市文化財保護課では「ヤマホコ・YAMAHOKO」としている，と回答している。



1963年のパンフレット『祇園祭』

ところで，山鉾を「ヤマボコ」と呼ぶように，後ろの語(ホコ)の最初の清音(ホ)が濁音(ボ)に変化することを連濁という。連濁は和語(大和言葉)に多く，漢語や外来語に少ないほか，前後の語のいずれかに濁音が含まれている場合は発生しないなど，いくつかの法則がある。前後の語が修飾関係にある場合は発生しやすく，並列関係にある場合は発生しにくいともいわれ，山のような鉾ならば「ヤマボコ」だが，山と鉾なら「ヤマホコ」が良いということになる。しかし，連濁の法則には例外がたくさんあり，また地元で昔から「ヤマボコ」と呼んできたという声も聞く。

祇園祭山鉾連合会が，1960年代から2019年まで毎年発行してきたパンフレット『祇園祭』には、各山鉾がローマ字併記で紹介されている。「放下鉾」の場合，もともと「HOKA HOKO」だったのが東京オリンピックの1964年から「HŌKA HOKO」，大阪万博の1970年から「HŌKA BOKO」へと変わり，そしてユネスコ無形文化遺産登録を機に2009年から再び「HŌKA HOKO」に戻るという変遷をたどっている。ということは，山鉾についても「ヤマホコ」→「ヤマボコ」→「ヤマホコ」という変遷が想定できる。

おそらく，いずれも外国人観光客を意識した改訂であり，1964年にはヘボン式では「ホカホコ」と読まれてしまうため，「ホーカホコ」と表現できる訓令式を採用したのだろう。1970年に「ホーカボコ」と変えたのは，当時の発音により近いものを採用したと理解すると合点がいく。つまり，京都では長らく「ヤマボコ」と発音する人の方が主流だったのでしょう。

（福持昌之）

	発行年	タイトル／解説	放下鉾の表記	備考
ホコ HOKO	不明 ～ 昭和38年（1963）	HOKO／Hoko	HOKA HOKO／Hoka Hoko	ヘボン式 大文字小文字併用
	昭和39年（1964） ～ 昭和44年（1969）	HOKO／Hoko	HŌKA HOKO／Hōka Hoko	訓令式 大文字小文字併用
ボコ BOKO	昭和45年（1970） ～ 昭和56年（1981）	BOKO／Boko	HŌKA BOKO／Hōka Boko	訓令式 大文字表記に統一
	昭和57年（1982） ～ 平成20年（2008）	BOKO／BOKO	HŌKA BOKO／Hōka Boko	訓令式 大文字表記に統一
ホコ HOKO	平成21年（2009） ～ 令和元年（2019）	HOKO／HOKO	HŌKA HOKO／HŌKA HOKO	訓令式 大文字表記に統一

京都をつなぐ無形文化遺産「京の地蔵盆」

令和２(2020)年夏―新型コロナウイルス感染症の影響により，地域行事の実施に際しては適切な感染防止策が求められており，京都の伝統行事「地蔵盆」も例外ではありませんでした。

京都市では，地蔵盆の楽しさを子どもたちに少しでも体験していただくとともに，地蔵盆の開催を検討されている自治会・町内会の皆様に参考としていただくため，インターネットを活用した体験イベント「テレ地蔵盆」及び適切な感染防止策を踏まえた地蔵盆のあり方を考える「地蔵盆ウィズコロナ」を実施しました。

「テレ地蔵盆」の実施

離れた所(＝tele(テレ))にいても実施可能な地蔵盆行事として，各町内会等でも活用していただけるよう，以下の取組を実施しました。

みんなでビンゴゲーム

インターネットを通じたビンゴゲーム。地蔵盆の時期である８月の平日９日間に，一定数の数字を午後５時にホームページ上で発表。ビンゴとなった方には，応募フォームから御応募いただいたうえで，抽選で景品をプレゼント。

地蔵盆のお話の動画の公開*

壬生寺 松浦俊昭副住職による地蔵盆についてのお話の動画をホームページで配信。

「地蔵盆ウィズコロナ」の実施

数珠まわしを例とした感染防止策の動画配信*

壬生寺保育園の御協力を得て，感染防止策を踏まえた数珠まわしを実施いただき，その様子の動画をホームページで配信。

地蔵盆実施に係る情報交流の場の設置

ホームページ上で，地蔵盆の実施に係る情報交流ができる場を設置。寄せられた情報のうち，町内会等で共通するような取組や幅広く活用していただけそうなアイデアを公開。

地蔵盆に縁のある方からのメッセージの発信

地蔵盆が地域の中で果たす役割を再認識していただくきっかけとなるよう，地蔵盆と縁の深い方からメッセージ等をいただき，Facebook「京都の文化遺産」で配信。

＊YouTube「京都の文化遺産」で現在も公開中

(伊藤勲，川又純，成瀬陽一)

初詣のあれこれ

京都の年末年始は慌ただしい。僧侶が十数人がかりで除夜の鐘を撞く知恩院や，参拝客が鐘をつける寺院には，日付が変わる前から大勢の参拝客でにぎわう。なかでも伏見稲荷大社では，例年200万人を超える初詣客を迎えるという。

京都市登録無形民俗文化財「おけらまいり」は，大晦日から元旦にかけて八坂神社で「おけら火」をいただいて帰るというもの。まず，12月28日の寅の刻（午前４時頃），本堂外陣で火鑽杵と火鑽臼を使って浄火を鑽り出し，「おけら燈籠」に移す。この火を31日の夜に境内に吊るされた燈龍に移し，これに白朮を加えて元旦の早朝まで焚き続ける。参拝客は，境内で吉兆縄とよばれる火縄（竹の繊維を縒った火持ちの良い縄）を買い求め，それに火を移す。いただいた「おけら火」で家の神棚の灯明をともしたり，雑煮を焚いたりすると縁起がいいとされている。また，元旦の午前５時頃から，本殿で折敷に削掛（白柳箸の削り屑）と白朮の根を合わせて盛り，それに点火する「白朮祭」が行われる。

ところが，江戸時代の八坂神社（当時は祇園社）への初詣の様子は，現在とはずいぶん違う。天明７年（1787）の『拾遺都名所図会』の「祇園削掛神事」の項に「毎歳除夜，子の刻の頃より社参の諸人，雑言を恣にし他人を誹謗す，仮令其声を聞き其人を知るといへども，これを争はず，邪義の祓にして勧善懲悪の意ならんか，其雑言に勝ちたる方迎年の吉兆なり」とある。日付が改まる子の刻（午前０時頃），参拝客が他人の悪口を言い合って参詣したらしく，それは穢れを祓う意味があったという。

平山昇氏によれば（『初詣の社会史』2014），江戸時代は元日に氏神や産土神への参詣，あるいはその年の恵方にある社寺に参詣する恵方詣も行われていたが，むしろ１月末までの初卯，初不動など「初縁日」への参詣が中心であったという。明治20年代になると鉄道の影響もあって，恵方詣や初縁日に参詣していた有名な社寺に，元日に参詣するようになった。それを「初詣」と呼んだという。

ただ，明治27年（1894）の篠田正作著『近体婦女文章』に「初詣に人を誘ふ文」の文例として「明日ハ初卯に候はゝ住吉神社へ参詣」，明治41年（1908）の篠田クニ著『女子書翰文』に「初詣に友だちを誘ふ手がみ」として「今日は初天神で嘸ぞ賑やか」とあるなど，明治時代を通じて「初詣」は初縁日への参詣の意味もあった。つまり，１月21日の初弘法（東寺），25日の初天神（北野天満宮）も初詣の一種ということになる。　（福持昌之）

「初縁日」の例

名称（別名）	日	対象
初薬師	１月８日	薬師如来
初　戎（十日えびす）	１月 10 日	恵比寿（恵比須，恵美須）
初閻魔	１月 16 日	閻魔大王
初聖天	１月 16 日	大聖歓喜天（聖天さん）
初観音	１月 18 日	観音菩薩
初大師　（初弘法）	１月 21 日	弘法大師（弘法さん）
初天神	１月 25 日	天満宮（天神さん）
初不動	１月 28 日	不動明王
初弁天	巳の日	弁才天（弁財天）
初　寅		毘沙門天
初　卯		東京・亀戸天神社内の妙義社 大阪・住吉大社
初庚申		帝釈天
初　午　（初稲荷）	２月初午	稲荷

もうひとつの年越し“節分”

節分には，年の数(あるいはそれに１つ加えた数)の豆を食べますが，その時に「年を越す」意味があると聞いたことはありませんか。

節分とは，春夏秋冬の節目を指し，本来は１年に４回あるのですが，今では立春の前日の節分が代表的とされています。

明治５年(1872)までの旧暦(太陰太陽暦)では，１年の始まりの日が２つありました。ひとつは，月の満ち欠けを基準として１年を12か月(閏年は13か月)に割り，その１月１日とされる日です(今でいう旧正月)。もう一つが、太陽の位置から１年を24等分し(二十四節気)，冬至と春分の中間におかれた立春です。

吉田神社の方相氏と侲子

今でこそ，正月は１月，節分は２月(令和３年は２月２日)と約１か月違いますが，旧暦の時代では，太陽と月の２つの算定方法による「年越し」は，ほぼ同じ時期に巡ってくるものであり，それらの順番が入れ替わる年(年内節分)もありました。延宝４年(1676)序の年中行事解説書『日次紀事』では，節分の記事が12月の巻末に掲載されており，「もし年内に節分あるときは」といった文言もみられます。

平安神宮の方相氏と侲子

月の満ち欠けの周期は約29.5日，１年で約354日です。これは地球の公転による１年に比べて約11日少ないため，旧暦では19年の間に７回の割合で閏月を加えて調整していました。そして，閏月のあった年の12月には，年内節分が生じていたのです。

『日次紀事』には，大晦日の行事として，各家の門口に鰯の頭やヒイラギを飾り，家の中では歳男が「鬼は外，福は内」と叫んで疫を払い，福を呼び，煎豆を食べるなどと記されています。また，節分の行事としても，宮中で煎豆をまいて疫鬼を逐うとあり，２つの年越し行事の儀礼はよく似ています。

ところで，節分で鬼を追う行事の源流は，宮中の追儺であるといわれています。それは，四ツ目の面をつけた方相氏と呼ばれる人物が戈と楯を持ち，侲子という小童たちを率いて内裏の４つの門を巡り，大声を発して戈で楯を打ちます。そして，最後に群臣が桃の弓で葦の矢を放ち，鬼を追い払うというものでした。この行事は８世紀にはじまりましたが，その後，方相氏はその異形の姿から，逆に鬼や妖怪とみなされるようになりました。

現在，多くの神社仏閣の節分祭(節分会)で鬼が登場しますが，吉田神社節分祭，平安神宮節分祭，鞍馬寺節分追儺式では，鬼を追う本来の方相氏が登場します。

(福持昌之)

京の食文化

【 平成25年10月選定 】

大切にしたい心，受け継ぎたい知恵と味

千有余年の永きにわたり都が置かれた歴史を背景に，季節感やおもてなしの心，本物へのこだわりといった精神文化が食文化にも浸透しています。京都における食は，ご飯を主食としつつ，旬の野菜を中心に乾物や大豆加工品，漬物などの副食を上手に組み合わせた，一汁三菜が基本の出汁をベースにしたもの。家庭の食卓には，家庭のおかず，いわゆる「おばんざい」を中心に，暦や年中行事に合わせた行事食などが並びます。また，五色・五味・五法を五感で愉しむ京料理や料理を出前する独特の仕出し文化を生み出しています。

京・花街の文化

【 平成26年3月選定 】

いまも息づく伝統伎芸とおもてなし

芸妓や舞妓が舞・踊りをはじめとした数々の伝統伎芸により心のこもったおもてなしをする文化が連綿と受け継がれているまち・「花街」。京都には現在，祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東の５つの花街があり，歌舞練場，お茶屋，置屋などが集まり，風情あるまちなみを維持しています。芸妓や舞妓は，日々，芸事の習練を積み重ね，彼女らを引き立てる装いは伝統工芸の職人や髪結い師，着付師など，多くのわざに支えられています。また，かつての花街である島原は，太夫文化を伝えるまちとして存在感を示しています。

京の地蔵盆

【 平成26年11月選定 】

地域と世代をつなぐまちの伝統行事

毎年 8 月中旬から下旬にかけて行われる伝統的な民俗行事である「地蔵盆」。町内安全や子どもの健全育成を願う町内の行事として，時代とともに変化しながら受け継がれ，地域コミュニティの活性化に重要な役割を果たしていた地蔵盆は，京都をはじめとする近畿地方で盛んに行われています。お地蔵さんを飾り付け，お供えをして祀り，その前で子どもたちが集まり遊ぶスタイルが一般的で，子どもたちにとって夏休みの最後を飾る行事となっています。

京都をつなぐ無形文化遺産

京都には数多くの無形文化遺産がありますが，法令上文化財としての指定・登録が困難なものがあります。
そこで，それらの価値を再発見，再認識し，大切に引き継いでいこうという市民的気運を盛り上げるため，
平成25年4月，京都市独自の制度「京都をつなぐ無形文化遺産」制度を創設し，これまでに6件を選定しました。

京のきもの文化

【 平成28年2月選定 】

伝統の継承と新たなきもの文化の創出

京のきもの文化は，平安時代から宮廷を中心とした「みやびの文化」，また茶道・華道といった我が国固有の文化とともに発展しました。「西陣織」や「京友禅」をはじめとする伝統産業は，生産工程の分業が特徴で,高い技術は世界的に認められています。京都では，和の文化の象徴ともいうべき伝統と格式を備えたきものが，維持継承されています。一方で現代的なファッション感覚で気軽にきものを楽しみたいというニーズが高まっています。

京の菓子文化

【 平成29年3月選定 】

季節と暮らしをつなぐ，心の和

京の菓子は，季節の移ろいをことさら大切にする精神性のもとに育まれ，旬の素材を使うだけでなく，意匠で季節を先取りして表現しています。四季折々の美しい情景を映し出した菓子は，季節や年中行事に思いを巡らせるとともに和の文化を楽しむことを思い起こさせ，日々の暮らしの中で単なる食べ物にとどまらない役割を果たしています。菓子のあるところには会話があり，人と人との間に和やかな雰囲気をもたらす。京の菓子文化には，次の季節を待つ楽しみを家族や友人、客人と分かち合い，会話を弾ませる心遣い，おもてなしの精神が受け継がれています。

京の年中行事

【 平成30年3月選定 】

季節・暮らし・まちを彩る生活文化

年中行事には，お盆など日本の民俗に根差したもの，祭礼に伴うものなどがあり，それぞれにまつわる食べ物やしつらい，しきたりなどを伴いながら，京都の暮らしを彩り，暮らしの中に育まれてきました。日々の暮らしの中で，楽しみや安らぎをもたらしてきた年中行事は，無病息災を祈り，神仏や自然への畏敬の念を深めることを通じて人々の心を豊かにするとともに，家族とのふれあいを深め，さらに，地域コミュニティの活性化，地域経済・ものづくりの継承・発展につながっています。

イラスト：松平莉奈

4 資料

資料 1　展示の記録

入場者数

ゼスト御池

日		入場者数
11 月 5 日	木	24,847
11 月 6 日	金	25,592
11 月 7 日	土	27,120
11 月 8 日	日	22,399
11 月 9 日	月	25,659
11 月 10 日	火	25,584
11 月 11 日	水	25,173
11 月 12 日	木	24,193
11 月 13 日	金	25,974
11 月 14 日	土	27,791
11 月 15 日	日	23,462
11 月 16 日	月	24,234
11 月 17 日	火	24,236
11 月 18 日	水	23,934
11 月 19 日	木	24,657
11 月 20 日	金	28,603
合計		403,458

■ゼスト御池
開場日数　16 日

■京都府立
京都学・歴彩館
開場日数　24 日

■南丹市立
文化博物館
開場日数　26 日

合計開場日数
66 日
合計入場者数
403,886 人

京都府立 京都学・歴彩館

日		入場者数
2 月 1 日	月	9
2 月 2 日	火	8
2 月 3 日	水	6
2 月 4 日	木	10
2 月 5 日	金	16
2 月 6 日	土	休室
2 月 7 日	日	休室
2 月 8 日	月	2
2 月 9 日	火	14
2 月 10 日	水	休館日
2 月 11 日	木	休館日
2 月 12 日	金	11
2 月 13 日	土	休室
2 月 14 日	日	休室
2 月 15 日	月	6
2 月 16 日	火	16
2 月 17 日	水	6
2 月 18 日	木	16
2 月 19 日	金	8
2 月 20 日	土	休室
2 月 21 日	日	休室
2 月 22 日	月	8
2 月 23 日	火	休館日
2 月 24 日	水	7
2 月 25 日	木	13
2 月 26 日	金	10
2 月 27 日	土	休室
2 月 28 日	日	休室
3 月 1 日	月	11
3 月 2 日	火	14
3 月 3 日	水	7
3 月 4 日	木	30
3 月 5 日	金	13
3 月 6 日	土	休室
3 月 7 日	日	休室
3 月 8 日	月	3
3 月 9 日	火	80
合計		324

南丹市立 文化博物館

日		入場者数
2 月 20 日	土	11
2 月 21 日	日	9
2 月 22 日	月	休館日
2 月 23 日	火	4
2 月 24 日	水	4
2 月 25 日	木	2
2 月 26 日	金	0
2 月 27 日	土	0
2 月 28 日	日	0
3 月 1 日	月	休館日
3 月 2 日	火	0
3 月 3 日	水	1
3 月 4 日	木	0
3 月 5 日	金	1
3 月 6 日	土	7
3 月 7 日	日	10
3 月 8 日	月	休館日
3 月 9 日	火	5
3 月 10 日	水	4
3 月 11 日	木	1
3 月 12 日	金	3
3 月 13 日	土	4
3 月 14 日	日	10
3 月 15 日	月	休館日
3 月 16 日	火	5
3 月 17 日	水	5
3 月 18 日	木	3
3 月 19 日	金	4
3 月 20 日	土	7
3 月 21 日	日	4
合計		104

アンケート選択回答欄

		ゼスト御池			京都府立京都学・歴彩館			南丹市立文化博物館		
項目		男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
～30 歳代		6	9	15	1	4	5	1	1	2
40 歳代		5	6	11	1		1	4	1	5
50 歳代		2	6	8	3	2	5	11	1	12
60 歳代～		8	9	17	13	3	16	13	5	18
合計		21	30	51	18	9	27	29	8	37
大変興味深かった		16	21	37	12	8	20	3	2	5
興味深かった		3	7	10	6	1	7	5	1	6
特に興味を感じなかった		1	2	3				2	1	3
よくなかった										
未回答		1		1				19	4	23
合計		21	30	51	18	9	27	29	8	37
京都市内	北区	3	1	4	3	2	5			
	上京区		4	4						
	左京区	5	2	7						
	中京区	3	5	8						
	東山区	1		1	1		1			
	山科区		4	4	1		1			
	下京区				1		1			
	南区					1	1			
	右京区	6	3	9	4	1	5			
	西京区		1	1						
	伏見区	1	1	2	2		2			
	区不明							1	5	6
京都府内	南丹市							7		7
	亀岡市	1		1				2	1	3
	舞鶴市							1		1
	向日市							1		1
	長岡京市				2		2			0
	宇治市							1	1	2
	八幡市		1	1						
府外	滋賀県	1	1	2						
	大阪府		1	1	1	2	3	3	1	4
	兵庫県		1	1	1	1	2	4		4
	奈良県		2	2	2		2	1		1
	不明					2	2			
未回答			3	3				8		8
合計		21	30	51	18	9	27	29	8	37

チラシ

11 月 ゼスト御池展示

2～3月 京都府立
京都学・歴彩館展示

2～3月
南丹市立文化博物館展示

アンケート自由回答欄

〈ゼスト御池〉
- 伝統行事を「伝える」ことは大事。まずは何が行われているかを伝えること。
- 「回覧板に見る地域の行事」が，たいへん興味深かった。
- キレイな展示です。
- 地蔵盆の展示が興味深い。
- 知らない祭を知ることができて，大変おもしろかった。
- パネルは文字が多くて読むのが大変。写真を多くして通る人の関心を引きつける工夫した方が良い。
- 大学の授業がきっかけで見に来ましたが，京の祭りに触れる機会はなかなか無かったので良い学びになりました。
- 地蔵盆，今年はどうしたのかなと思っていたので，いろいろ興味深かったです。
- 他県（関東）から淡路島に嫁ぎ，伝統行事が多いことにおどろきました。娘たちが京都で学ぶ機会に，京都の伝統行事も楽しんでいます。淡路島内の行事も京都から伝えられたのでしょうか？ 似ているものもあるようです。
- 知らないことが多かった。
- 知らないことも多く，わかりやすかった。
- 他県から移り住んだので，地蔵盆など地域行事がよく分からなかったので勉強になった。
- コロナ禍での，それぞれの行事の対策が興味深かったです。
- コロナ禍で全ての祭りを中止にしたことは残念です。工夫して行うべきであった。中止せずに，全て行ったらよかった。やり方はいくらでも工夫ができたと思う。
- 地域の伝統行事を守り続けてほしい。
- 地域のコミュニティー作りの役割をしていることがわかり伝統の祭りを守りたいと思いました。
- 井上頼壽資料と八瀬天満宮社例祭。絵がおもしろかった。
- 是非みたい！ と思いました。資料がないのが少し残念でしたが，パネルの写真をとってから，ゆっくり確認しようと思います。
- 身近な行事だが，知っているようで知らない事が多いことに気付かされた。
- 粟田神社の夕方の祭りで（ねぶた祭りを小さくした様な物）を通りかかって見，たいへん興味深く感じました。良かったです。事例紹介：地蔵盆／町内の会館／夏休み中の土日／くじ引き，子供たちのゲーム等，秋祭り／私有地／フランクフルト，焼きいかそば，みたらし団子，ふるまい酒，甘酒，とうもろこし等
- 今年はコロナのため残念でした。事例紹介：地蔵盆／８月24日に近い日曜日／数珠繰りの後，子供たちがゲームをしたりする
- 京都の祭りは歴史的に深いので，もっと勉強したいと思います。
- 福引，花火。子供のころを思い出します。続けてほしいです。
- 地道な調査・研究，感動します。
- これからたくさんの人が結婚して子供を作ってください（少子化対策）。

〈京都学・歴彩館〉
- 記録に残す事の大切さ。今の形は今でしか無いかもしれない。守っていく事の大切さ。失われた物はもうもどらない。今を大切に。世界が本当の意味で平和でなければならない。
- 又，順次，様々な祭礼を御紹介下さい。
- 写真があるのでわかりやすい。
- 内容はとても興味深いものでしたが，字が多すぎるため，図などがあるともっと楽しみながら学ぶことが出来ると思いました。
- 竹田の延座参座が展示されてありがとうございます。関係者として，新たな気持ちで今後も続けたいと思います。
- 各地の特徴ある行事がしっかりまとめられており，わかりやすかった。
- 未指定の文化財の紹介もあってたいへん面白かったです。初詣と節分の話もためになりました。
- 知らなかった行事が沢山あった。
- 京都にずっと在住していたけど，知らないことばかりだったので，おもしろかったです。
- 徐々に失われていく，伝統文化を継承していくためにも，頑張ってください。
- ありがとうございます。

〈南丹市立文化博物館〉
- 歴史的な文化施設などは，がんばって残して欲しいと思う。
- 父のふるさと南丹市八木町日置の綱引き行事が参考となりました。
- 各々の地域に保存会が存在する。伝統の継続は …。
- 今まで通り道として立ち寄ることがなかったのですが，少しずつですがいろいろと知りたいと思います。
- 園部の歴史を感じました。
- 昔の祭りを再認識し，よかった。

事例紹介

- どんど：大宮小学校（北区）／１月成人の日前後／〆縄や書初めをたき上げる，おもちを焼いて食べる。
- 葵忠祭：嵯峨車折神社の内，葵忠社前／４月13日前後の日曜日，但しここ数年中断／先祖がまつられている祠にお参りする…だけなのですが
- 祭礼：一乗寺八大神社／５月５日／囃子行列ほか神輿
- 嵯峨祭：右京区嵯峨／５月／神輿と剣鉾
- 六斎念仏（小山郷）：上善寺・御霊神社／８月22日ほか。
- 地蔵盆：左京区高野茶山駅近く／近所の子供達がにぎやか
  左京区一乗寺葉山町／８月23日頃／仏事のみ（町内に子供がいなくなり老人がおこなっている）
  左京区若王子町，若王子神社境内の祠前／８月24日前後／お経あげのあと数珠廻し，ゲームほか，旧大日盆
  右京区太秦／８月／お菓子やゲーム
  上京区薬屋町419御所前スカイマンション／８月24日に近い日曜日／子供会で行事を行う
  中京区鯉山町町席／８月24日に近い日曜／数珠繰りの後，子供たちがゲームをしたりする。子供の人数多いです。
  中京区元本能寺町／８月
  北区上賀茂深泥池／８月23日前後／子供たちがゲーム
  北区大宮東小野堀町／８月20日頃町内の方の家の庭／ゲームなど
- お火焚：下京区松原中之町／11月初旬・中旬
- 古式一里塚松飾式：下京区松原中之町／祇園祭の神事
- 石清水祭／石清水八幡宮／９月15日／日本三大勅祭のひとつ。
- ずいき祭／北野天満宮御旅所／10月１～３日
- 山科義士まつり／山科区大石神社／12月14日／行列（東映のかたに着付けをしてもらって大人と子供の行列あり）
- 城南宮祭礼：伏見区／10月第３日曜
- 今宮神社祭礼／右京区花園駅の北／10月第３日曜／一度消えかけたが何とかやっている。剣鉾があるが差せない
- 山王祭：右京区山ノ内／10月20日付近の日曜／みこし，ちご他
- その他　天満書，筆始祭，八朔祭，節分祭，小山郷六斎念仏，千本ゑんま堂大念佛狂言，葵祭，祇園祭，五山送り火，など

資料２　京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会について

京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会規約

（名称）
第１条　本会は，京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会(以下「実行委員会」という。)と称する。
（目的）
第２条　実行委員会は，地域の貴重な財産である伝統的な行事が再評価され、地域の活性化に資するよう活用されることを目指し、様々な老若男女に対して普及啓発を図ることを目的とする。
（組織）
第３条　実行委員会は，第２条の目的に賛同し、第４条の事業に協力する者で、会員１人以上の推薦で理事会の承認を得た者とする。
（業務）
第４条　実行委員会は，前条の目的を達成するために必要な事業に関する企画及び運営に関する一切の業務を行うものとする。
（役員）
第５条　実行委員会には，次の役員を置く。
委員長　　１名
副委員長　１名
会計　　１名
委員　　若干名
監事　　１名以内
（役員の職務）
第６条　委員長は，実行委員会を代表し，会務を総理する。
２　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代理する。
３　会計は、実行委員会の経理を担当する。
３　監事は，実行委員会の業務及び会計の状況を監査することを職務とし，第９条に定める議決権を有しない。
（任期）
第７条　委員の任期は２年以内とし，再任を妨げない。
２　委員に補欠等により選任された委員の任期は，前任者の残任期間とする。
（会議）
第８条　実行委員会は，委員長が招集し，委員長が議長となる。
２　委員長は，必要があると認めるときは，委員以外の者を会議に出席させ，意見又は説明を求めることができる
（議決事項）
第９条　実行委員会は，次の各号に掲げる事項について審議し，決定する。
(1) 事業計画及び事業報告に関する事項
(2) 予算及び決算に関する事項
(3) 規約の改廃に関する事項
(4) その他委員長が必要と認めた事項
（会計）
第10条　実行委員会の経費は，負担金，補助金，寄付金，事業の開催に伴う収入及びその他の収入をもって充てる。
（会計年度）
第11条　実行委員会の会計年度は，毎年４月１日に始まり，翌年３月31日をもって終わる。
（解散）
第13条　実行委員会は，第４条の業務が完了したときに解散する。
（補則）
第14条　この規約に定めるもののほか，実行委員会の運営に関し必要な事項は，委員長が定める。

附　則
この規約は，平成29年11月８日から施行する。

京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会名簿

役職名	氏　名	所属団体名職名
委員長	天野文雄	京都芸術大学舞台芸術研究センター 所長・教授
副委員長	秋田吉博	公益社団法人全日本郷土芸能協会 理事
委員	伊藤勲	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 担当課長
委員・会計	福持昌之	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 主任・文化財保護技師
委員	井尻智道	南丹市立文化博物館 館長
委員	熊内照夫	綾部かんばやしの里体験推進協議会 会長
監事	北田栄造	公益財団法人京都市文化観光資源保護財団 事務局長

企画・運営

天野　文雄　京都芸術大学舞台芸術研究センター 所長・教授
井尻　智道　南丹市立文化博物館 館長
○ 福持　昌之　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 主任・文化財保護技師
今中　崇文　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 文化財保護技師
竹市　直彦　自然堂株式会社 代表取締役

○はリーダー

協力機関等

ゼスト御池運営事務所
梅木　麻帆
吉忠マネキン株式会社
家村　公崇
株式会社バリュープランニングアンドワークス
小野　政幸　谷口　円
立命館大学映像学部
鈴木　岳海　鈴木　陽斗
京都府立京都学・歴彩館
平井　俊行　吉岡　直人
川口　成人　中西　大輔
杉本　弘幸　寺嶋　一根
南丹市立文化博物館
犬持　雅哉　中嶋　裕章
荒田　雄市　岡田　和代
前川　那月
京都府教育庁指導部文化財保護課
向田　明弘
國學院大學
大東　敬明
佛教大学宗教文化ミュージアム
長谷川奨悟
右京ふれあい文化会館
廣瀬　孝幸　鈴木　康之
野口　功嗣
山科区役所地域力推進室
鈴村　哲也　吉田　悠夏
山科義士まつり実行委員会
澤田　清一
ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会
浅井　定雄　野原　孝喜
林　伸行　林　則子

池内　惠二　井上　成哉
奥村　晃代　加納　敬二
黒須あおい　坂井　保夫
嶋　民子　迫間　智恵
藤原　圭　松浦　俊昭
松尾　恒一　松本　莉奈
宮田　勝行　横田　彩乃

写真協力

柿本　雅美　加藤　雅樹
田中はるお　中野　貴広
村田　寛明　南丹市役所
京都大学芦生研究林

デザイン

自然堂株式会社
竹市　絵美
浅野　青葉

京都の祭り・行事　―京都市と府下の諸行事②

編集・発行　京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会

［連絡先］
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
〒 604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町 394 Y.J.K. ビル 2 階

発　行　日　令和 3 年 3 月 23 日

本事業は、令和 2 年度 地域文化財総合活用推進事業（地域文化遺産）の助成をうけて
実施する「京都の文化遺産総合活性化事業」の一部です。